

小中高が一体となったふるさと教育
モデルカリキュラム

2023-2024



目 次

はじめに ～長崎県のふるさと教育～	1
I 校区の垣根を越えたふるさと教育 長崎市	
仁田佐古小学校 日見中学校	2
II 地域の魅力ある教育資源を生かしたふるさと教育 島原市	
三会小学校 三会中学校	12
III 小・中の学びの系統性を生かしたふるさと教育 大村市	
三浦小学校 鈴田小学校 大村小学校 玖島中学校	22
IV 地域・学校の強みを生かしたふるさと教育 対馬市	
比田勝小学校 比田勝中学校	30
V コミュニティ・スクールを活用したふるさと教育 南島原市	
口之津小学校 口之津中学校	40

はじめに

～長崎県のふるさと教育～

背景 「深刻さを増す少子化・高齢化、協調・競争と分断・対立により混迷の度を増すグローバル情勢、気候変動に伴う自然災害の激甚化、生成 AI などデジタル技術の発展といった大きな変化があいまって、社会や経済の先行きに対する不確実性がこれまでになく高まっています。これからの我が国を担う子供たちは、激しい変化が止まることのない時代を生きることになります。」（「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」中央教育審議会 令和6年12月25日）

変化が激しい予測困難な社会と表現されるこれからの時代、中央教育審議会の諮問にもあるように、これまでになく社会や経済の先行きに対する不確実性が高まっている。本県においては、少子化・高齢化、生産年齢人口の県外流出が進み、地域活力の低下、地域コミュニティの希薄化が懸念されている。このような中、子供たちは、ふるさとの未来と自分の将来を重ねながら、希望に満ちた夢を描くことが困難な状況にある。

意義 子供たちには、それぞれが学ぶ意義を見出し、生涯にわたって主体的に学び続け、自らの人生を力強く切り拓く力、異なる価値観を持つ多様な人々と協働しながら諸課題を解決する「持続可能な社会の創り手」としての力を身に付ける必要性が高まっている。そのため、学校教育においては、子供たちが将来、個人として幸福や生きがいを感じながら自らの人生を歩むとともに、地域や社会全体の福利を享受するウェルビーイングの向上を図ることができるよう、地域と協働しながら豊かな学びを実現していくことが必要である。ふるさと教育は、その一端を担っており、本県の教育にとって欠くことができないものである。

育成する資質・能力 長崎県のふるさと教育は、「ふるさとの未来を担う人材」を育成することを目指している。「ふるさとの未来を担う人材」とは、ふるさとで活躍する人材や、ふるさとを離れてもふるさとの発展に貢献しようとする人材を指している。

「ふるさとの未来を担う人材」として必要となる資質・能力は、ふるさとを愛し、誇りに思う心情、ふるさとに対する深い理解（自然、歴史、伝統、文化、産業、ふるさとの発展に尽くす人々等）、チャレンジ精神、創造性、探究心、協働性、コミュニケーション力、アイデンティティ、自尊感情等である。本県ではこれらの資質・能力を「ふるさとの未来を担う実践力」とし、これまで、研究指定校による研究実践を通して、その育成に係るふるさと教育の充実・普及に取り組んできた。

研究 令和5～6年度の2年間は、「小中高が一体となったふるさと教育推進事業」として、長崎市、島原市、大村市、対馬市、南島原市の5市に委託し、地域課題の解決に向けた探究的なふるさと教育の研究に取り組んだ。

その核となるのが異校種間の連携によって12年間を見通した系統的なふるさと学習の研究である。研究を委託した5市は、地域の実情や学校の強みを生かし、取組の方法、内容等にそれぞれ独自性を出しながら研究を進め、着実に成果をあげている。

本冊子の活用にあたって 本冊子は、研究における各市の特色を紹介するものである。各市の取組を紹介した項の冒頭には、注目いただきたいところを端的に紹介している。これを踏まえて本冊子を御覧になり、県内各市町、そして小、中、高等学校におけるふるさと教育の工夫・改善の参考として活用いただきたい。

校区の垣根を越えたふるさと教育

長崎市立仁田佐古小学校 長崎市立日見中学校

研究協力校：長崎県立長崎南高等学校 長崎県立長崎鶴洋高等学校

長崎総合科学大学附属高等学校 鶴鳴学園長崎女子高等学校

長崎市では、これまでに指定校が大切にしてきた地域との協働を軸にしながら、校区が異なる学校間の連携に焦点を当てたふるさと教育の在り方について研究した。

日本における近代西洋医学発祥の地にある仁田佐古小学校と長崎街道の要となった地にある日見中学校は、それぞれに魅力的な地域人材や資源を有している。その魅力ある「ひと・もの・こと」を共有しながら、市域全体をふるさとと捉え、校区を越えた連携によって、「ふるさとの未来を担う人材の育成」を目指した。

子供の実態も地域の特色も異なる学校間の連携を図るには、相互の取組について理解を深め、カリキュラムを見直すことが必要であった。長崎市では、市内の県立高校や校区内の私立高校の協力を得ながら「ふるさと教育を通して、子供たちに育みたい資質・能力は何か」「どのような連携が学びの可能性を広げるのか」という視点で何度も協議を重ねた。協議の中で、小・中・高で育成したい3つの資質・能力が明確になると、指定校での実践は加速し、新たな連携を生み出しながら、ふるさと教育の充実が図られていった。このことから、校区が異なる学校間であっても、「目的（育成する資質・能力）」を共有することで、連携することが可能であることが明らかとなった。

I 育成する資質・能力

長崎市の指定校では、ふるさと教育を通して以下の3つの資質・能力の育成を目指し、実践に取り組んだ。

(1) 郷土愛

地域との交流など、ふるさとについての学びの中から、ふるさとのよさを知り、ふるさとのために考えたり、行動したりすることを通して、ふるさとを愛し、誇りに思う心を育む。学びを通して「ふるさとで活躍したい」「ふるさとを離れていても貢献したい」といったふるさとの未来を担う人材の育成につなげていく。

(2) 課題解決能力

ふるさとという身近なものを題材とし、その課題を発見し、他者と協働して、その課題解決に取り組む経験は、より広い視野で、ふるさとの可能性を模索し、ふるさとを支え、発展に貢献する第一歩となると考える。ふるさとの魅力や課題を探究する中で、情報分析力や調整力、表現力などを高めていく。

(3) コミュニケーション能力

ふるさとについて学んだことをまとめたり、発信したりする中で、自分の考えを伝えるだけでなく、相手の思いを尊重し、違いを整理し、的確に反応できる力を身に付ける。

2 年間指導計画

【育成する資質・能力】 郷土愛・課題解決能力・コミュニケーション能力

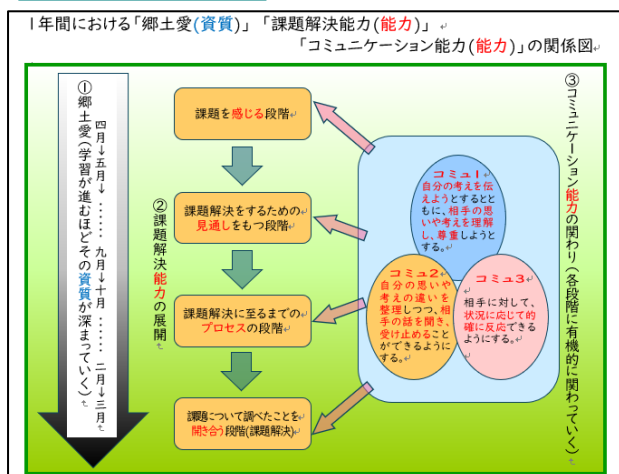
段 階	連携に係る人・もの・こと	具 体 的 な 学 習 内 容
各高等学校	長崎総科大附属高 ドローン教室 日見地区ドローン映像 の提供【中高】	各高等学校が作成する「ふるさと教育」体系図 SDGsの視点による学習 キャリア・プランニング 探究学習発表会 地域の環境学習・清掃 地域企業でのインターンシップ 行政・地域に向けた発信・発表会 近隣小・中学校・大学との連携 等
総合的な探究の時間	長崎鶴洋高 日見の海の調査 【中高大】	
日見中学校	日見地区コミュニティ 連絡協議会会長 【中高大】	【目指す生徒像】平和で豊かな社会・ふるさとを創る力と志を持つ生徒 【全校テーマ】 ～つなげよう、日見プライド！～日見を知り、日見を愛し、日見を創る～ 【1年テーマ】 日見の過去を知ろう 【探究課題】 日見地区の人・もの・ことに関心を持ち、身近なものへの関心を高め、そのよさを再認識し、誇りを持つ。 【2年テーマ】 日見の現在を学ぼう 【探究課題】 日見地区の人・もの・ことのよさや課題を知り、自分の役割について自覚し、地域との結びつきに気付く。 【3年テーマ】 日見の未来を創ろう 【探究課題】 町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人や組織と協働し、日見の活性化にむけて提言する。
総合的な学習の時間	TAKENOEN【中高】 日見地区ペーロン協会【中高】 日見中学校区 青少年育成協議会【中高大】 社会教育関係者【小中高】	
仁田佐古小学校	ペンギン水族館【小中】 佐古地区連合自治会長 (歴史風俗研究家)【小中】	【目指す児童像】ふるさとに愛情をもち、ふるさとを担おうとする実践力のある児童 「知る」→「関わる・深める」→「まとめる・発信する」 ①ふるさとのよさを知る ②ふるさとに関わったり、ふるさとのよさを深めたりする ③ふるさとのよさをまとめたり、発信したりする 高学年 ・ふるさとに生きる人々のものの見方や考え方を知り、よりよく生きることの大切さを実感することができる。 ・ふるさとの豊かな自然や文化の中で生きる一員として、自分たちにできることを考え、地域に働きかけることができる。 ・課題解決のために必要な情報を収集できる。 ・課題解決の具体的な方策を考え、実践することができる。 中学年 ・ふるさとに生きる人々の様々な工夫を知り、地域社会の一員としての自覚に目覚める。 ・身近な歴史や文化の良さを発見し、大切に守っていかなければいけないことを実感することができる。 ・相手に意図や目的を的確に伝えて、調べることができる。 ・情報を整理して伝えることができる。 低学年 ・身近な人々との交流の大切さを知り、相手に親しみや愛着をもつことができる。 ・学校や地域を探検したり、地域の人に触れ合ったりして、学校や地域のよさに気付くことができる。 ・身近な人々と進んで話をし、聞いたことをメモすることができる。 ・調べたことや気付いたことを自分なりの方法で発表できる。
総合的な学習の時間 生活科 等	長崎南高(新聞部) 新聞づくり教室【小高】 長崎女子高(龍踊部) 龍踊交流【小高】 長崎鶴洋高 ・長崎の水産業について ・ドローンを使ったプログラミング学習【小高】	

3 実践

長崎市の指定校は、距離が遠く、子供たちの直接的な交流学习の実現が困難であるという物理的な課題があった。そこで、指定校では、研究1年次に各学校のカリキュラムを見直しながら小中連携の在り方を模索し、2年次から地域の魅力ある資源を活用して具体的な連携を図った。

(1) 小学校での実践

①校内研究（概要）



仁田佐古小学校では、「ふるさとに愛情をもち、ふるさとを担おうとする実践力のある児童」の育成を目指し、実践を積み重ねた。校内研修の中で資質・能力の関係図を整理し、教職員で共通理解を図りながら、実践に取り組んだ。2年間をかけて、全学年のふるさと教育に係る詳細な指導計画を作成し、教職員が入れ替わっても、持続可能な連携・ふるさと教育の実践に取り組むことができるようにした。

②校区内での小・高連携



(長崎女子高校龍踊部との交流)



(長崎南高校新聞部との交流)

仁田佐古小学校区には、長崎南高校と長崎女子高校がある。それぞれの学校と情報を共有する中で、各高校の部活動との交流の可能性が明らかとなり、2校の部活動を中心とした連携に取り組んだ。

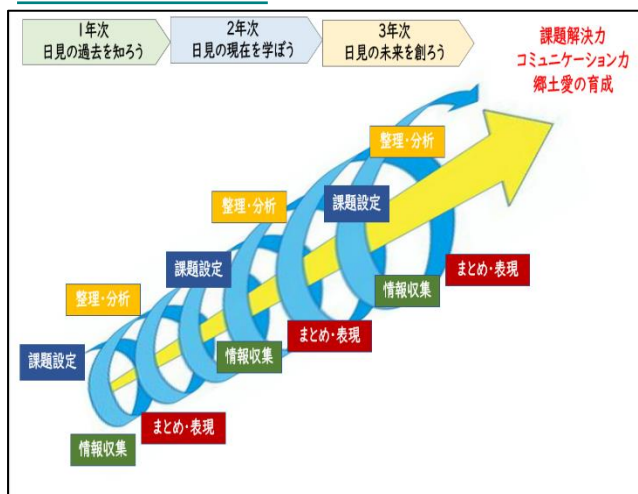
長崎女子高校とは、6年生の総合的な学習の時間において、龍踊の交流学习を行った。小学生が高校を訪問し、龍踊部が演技を披露する様子を見学したり、高校生が使用している龍を持たせてもらったりしながら、交流を深めた。

龍の演技や楽器の演奏について高校生から指導を受けた小学生は、高校生の重量ある龍を持った演技や揃った楽器の演奏を目の当たりにして、高校生の思いに触れ、仁田佐古小学校の龍踊に対しての思いを高めることができた。

長崎南高校とは、6年生の総合的な学習の時間のまとめで作成する新聞づくりに関する交流を行った。長崎南高校の新聞部は、県の強化指定文化部であり、新聞を作成する上でのポイントを分かりやすく小学生に教えていた。少人数でのグループ学習にしたことで、高校生に個別に相談する小学生もあり、身近な先輩からのアドバイスを積極的に新聞づくりに取り入れた。

(2) 中学校での実践

①校内研究（概要）



日見中学校では、「平和で豊かな社会・ふるさとを創る力と志を持つ生徒」の育成を目指し、実践を積み重ねた。教職員がふるさとへの思いを語り、生徒と共に地域から学ぶ姿勢を大切にしながらカリキュラムの見直しを図った。また、生徒の興味や関心を軸にした探究学習を展開するために、必要な機関との連携を図るなどして、地域に根差したふるさと教育を追究した。

②校区内での中・高連携



(日見まつりにおける中学3年生の発表)



(中高生が競技運営に携わった日見ロードレース大会)

日見地区の大きな特色として、地区の中に幼稚園から大学に至る全ての教育機関が所在している。長崎総合科学大学附属高校は、近隣に位置しており、中学校と同様、生徒が地域行事の活性化のために貢献しようと、例年、多くの地域行事に参画している。そこでペーロン大会、日見まつり、ロードレース大会の3つの大きな行事の中で連携を図った。

特に、令和5年度から日見地区の新たな行事として開催されるようになった「日見まつり」では、地域の教育機関（幼・小・中・高・大）が参画し、それぞれの持ち味を発揮して地域を盛り上げた。

中学生は、出店ブースでの職場体験、みこし担ぎ、ふるさと学発表会の開催、環境整備などに取り組んだ。高校生は、会の司会進行、ダンスの披露、eスポーツ体験やピザの販売、美術部の展示などに取り組んだ。

中・高生が主体的に運営に参画することで、地域の活性化に貢献した。



(長崎総合科学大学附属高校による日見まつりでのeスポーツ体験)



(長崎総合科学大学附属高校によるドローン教室)

長崎総合科学大学附属高校のドローン部に所属する高校生が授業を計画し、中学校でのドローン教室を実施した。ドローンのシミュレーターやトイドローンでの操作実技を行いながら、交流学习を行った。高校生の姿に、中学生も憧れを抱きながら、充実した交流を行うことができた。

(3) 校区の垣根を越えた地域人材（ひと）を活用した連携

①オンラインによる「ふるさと学」講話（6月） 小・中 郷土愛



（講師：長崎社会教育支援「草社の会」）



指定校には物理的な距離があり、子供たちが一堂に会する学びの実施に課題があった。そこで、オンラインによる講話の同時視聴に取り組んだ。

日見中学校から仁田佐古小学校へ講師を招いた講演会に関する情報を提供し、小学校でもオンラインで視聴しながら共に学ぶことができたようにした。

今回の講話は、両校における「ふるさと学」のガイダンスに際し、ふるさとの未来と自らの将来に夢や希望を描けるようにすることを目的として実施した。

②地域人材交流（7月） 小・中・地域 郷土愛



（講師：歴史風俗研究家）



仁田佐古小学校から日見中学校に対し、佐古地区連合自治会長であり、歴史風俗研究家の方を紹介し、人材交流という形での連携を図った。

各校では、校区の歴史や地名の由来に関する講話が行われ、子供たちの自分が住む地域への興味・関心の高まりが感じられた。

さらに各校では、校歌の作詞者、校歌の作詞・作曲者の御令嬢から校歌に込められたふるさとへの思いに関する講話を実施し、学校への愛着を深めた。

③高校生によるプログラミング教室（7月） 小・高 課題解決能力 コミュニケーション能力



（ドローンを目的地に着陸させるプログラミング体験）



長崎鶴洋高校（総合学科）の高校生によるプログラミング教室を実施した。

4つのグループに分かれ、高校生が小学生に指導した。プロポ（送信機）やアプリを用いたドローンを操作する活動に取り組みながら、プログラミングに関する理解を深めた。

高校生は、小学生の考えを尊重しながら、見守ったり助言をしたりしながら優しく寄り添っていた。専門的な知識を有する高校生と出会った小学生にとって、高校生は憧れの存在となった。

④地域人材交流（9月） 中・高 郷土愛 課題解決能力



（網場湾での水質調査）

中学2年生が立てた探究テーマの中に、長崎鶴洋高校に関する内容（海の環境・食品ロス）があった。その情報を共有したところ、高校側から講師（長崎総合科学大学教授）紹介があった。その後、中学2年生は、講師と共に網場湾沖に出て水中ドローンの撮影や水質調査を実施した。

また、中学校側からも高校側へ地域人材による食文化の保全や食品ロスに関する講演についての情報を提供し、水産科の教職員が中学生と共に講演に参加した。地域人材に関する情報を共有することで、各校が実施している学習活動を広げたり、深めたりすることができた。

⑤ 高校生からの宿題付き交流学習（7月～10月）



小・高

郷土愛

課題解決能力

コミュニケーション能力

【1回目の授業（7月実施）】

「長崎の海と魚」というテーマで、小学5年生の社会科「水産業」の学習と関連付けた授業を長崎鶴洋高校（水産科）の高校生が行った。授業では、長崎県周辺の海流や県の周辺で獲れる魚の種類に関するクイズや近海の珊瑚や貝に触れる体験的な活動が行われ、小学生の海産物に対する興味・関心が高まった。

授業の後半では、乾燥魚を実際に机の上に広げて、魚を種類別に選別する体験活動を実施し、小学生はそれぞれの魚の特徴を見分けながら選別作業を楽しむことができた。

ふるさとである長崎県の特色ある水産業について体験学習を通して学ぶことによって、社会科での学びをより深めることができた。



【高校生からの夏休みの宿題】

- ①長崎県内で釣りをする ②長崎の海産物について調べる ③長崎の海産物を使ったレシピを作る

【2回目の授業（10月実施）】

1回目の授業時に、小学生からは高校生への質問、高校生からは小学生に夏休みの宿題を互いに提案しており、それらを紹介し合う授業を10月に行った。高校生は、小学生からの質問に対し、スライド資料を用いながら分かりやすく説明した。

一方、小学生は夏休みに海産物を食材としたレシピ紹介や、釣り場によって釣れる魚の違い等を自作のスライド資料を使いながら説明した。

長崎鶴洋高校では、長崎近郊でよく獲れる「ウスバハギ」の商品開発に取り組んでいる。仁田佐古小学校の児童が提案した「ウスバハギ」をカレー味のフライにした高校生考案の「ウスバハギフリット」の試食を行い、小学生と高校生の充実した交流学習を行うことができた。

（※アレルギーについての配慮を行ったうえでの実施）

高校生からの宿題によって、単発的な交流ではなく、継続的な交流の中で、ふるさとについての学びを両者が深めることができた。



（ウスバハギフリットの試食）

【高校生から小学生へのメッセージ】

○私たちが小学生の頃は、パソコンを使ってスライドを作る授業とか受けたことがなかったので、パソコンを上手に使っていてすごいなと思った。

○夏休みに魚釣りに行ったり、いりこを使った料理に挑戦したりと高校生からの宿題を頑張ってくれて嬉しかった。これからも長崎の魚に興味をもってほしいと思う。

○魚が好きで長崎鶴洋高校（水産科）に入学した。高校では、資格が取れるので自分の夢を叶えるために資格の取得に励んでいる。小学生の皆さんも自分の夢に向かって頑張してほしい。

(4) 校区の垣根を越えた地域施設（もの）を活用した連携

① ペンギン水族館での異学年交流

小・中

郷土愛

課題解決能力

コミュニケーション能力



中学校の総合的な学習の時間（第2学年）のフィールドワークと小学校の生活科（第1学年）の校外学習の日程を調整し、日見地区にあるペンギン水族館にて対面による校区を越えた小・中学校の交流学习を実施した。

小学1年生は、中学生と一緒に見学をしながら長崎に住む生き物について学んだり中学生に質問をしたりしながら、活動を楽しんだ。

中学2年生は、初めて出会った小学生に戸惑いながらも、少しずつ打ち解け、コミュニケーションをとりながら館内を案内したり日見にある施設について紹介したりした。

小・中の学習内容は異なっているとしても、目的（育成する資質・能力）を共有しながら学習活動を計画することで、子供たちの直接的な交流学习の実現につながった。

施設職員からは、「施設職員ではなく地域の中学生在が魅力を紹介するという学習活動もできることを学ばせてもらった。」との感想が寄せられ、地域施設を活用した新たな連携の形を見出すことができた。

【中学生の感想】

身近にある水族館だけど、小学生に案内することで知らないことがたくさんあることに気付いた。

(5) 校区の垣根を越えた学習機会（こと）を活用した連携

① ふるさと学発表会「小・中学生による発表」

小・中

郷土愛

課題解決能力

令和6年度に指定校が実施したふるさと学発表会は、市内の公共施設を利用し、県内に広く公開した。



日見中学校による発表は、芒塚獅子舞の篠笛の演奏から始まった。この獅子舞の篠笛には、楽譜がなく、先人の指使いを真似ながら脈々と受け継がれてきた。中学生は、地域の方の思いに触れ、演奏に挑戦したが、最初は音を出すこともままならなかった。しかし、地域の方の協力を得ながら、練習を積み重ね、演奏することができた。

「ふるさと学」の発表では、『つなげよう！日見プライド！ふるさと「日見」を知り、「日見」を愛し、「日見」を創る』という全校テーマのもと、各学年の代表グループが発表した。

1・2年生は、クイズ形式で探究活動の成果を発表したり、高校生との関わりを通じて生まれたアイデアを発表したりするなど、表現力豊かな発表で会場を盛り上げた。

3年生は、地域に足を運び、中学生目線で課題を捉え、「自分が好きなこと」「自分の得意なこと」から考えた地域活性化に向けた提言を行った。ふるさと学のゴールの姿である中学3年生の姿は、参加した小学生にとっても下級生にとっても模範となる姿であった。

互いの発表を見ることで、「ふるさと学」への理解や上級生への憧れをもつことにつながった。





仁田佐古小学校による発表は、代表して5・6年生の児童が行った。5年生は、低学年が生活科の授業やまち探検で多くの地域人材と学んだことや中学年が町名の由来について学んだことや長崎鶴洋高校との連携を生かし、ドローンを活用したプログラミング体験を行ったことについて発表した。

そして、長崎鶴洋高校と共に長崎の水産業について学び、小学生のアイデアで長崎の魚を使用した商品開発が実現した様子などを発表した。

6年生は、町づくりのアイデアや長崎南高校新聞部・長崎女子高校龍踊部との交流の様子について発表した。

最後に仁田佐古小学校伝統の「龍踊」を披露した。小学生の龍踊を見た中学生は、会場から聞こえてくる「ヨイヤー」や「モッテコーイ」の掛け声に戸惑っている様子であったが、次第に「モッテコーイ」と声を掛ける姿が見られた。

このように、校区が異なる学校の「ふるさと学」を共有することで、新たな地域の魅力に気付いたり、自分の地域の魅力を再確認したりすることができた。

参加した地域の方の中には、指定校の発表に感動して涙をされる方もおり、会場全体のふるさとへの思いが高まる発表会となった。

②ふるさと学発表会「ふるさとを語ろう会」



小・中・高・地域

郷土愛

コミュニケーション能力

「ふるさとを語ろう会」では、地域の方、指定校の教職員・児童生徒、研究協力校の教職員をパネリストとし、トークセッションを行った。「ふるさとについて学んだことで一番心に残ったこと」や「どのような思いでふるさと教育に関わっているのか」、「ふるさと教育に関わった高校生にはどのような変容があったのか」などのテーマに対して熱心なディスカッションが行われた。

トークセッションの終末では、小学生から中学生に対し「将来、ふるさと長崎にどのように貢献していきたいか」という質問がなされた。中学生は、これまでの学習で見出した地域の課題を踏まえながら、自分の将来像について語っていた。

子供と大人が一緒になってふるさとについて語る機会を設けることで、子供も大人もふるさとに対する見方が広がり、より郷土愛を深めることができた。

【ふるさと学発表会に参加した方から】

- 小中高が近い距離にある状況でも連携は難しいと感じていたが、長崎市の取組のように工夫をすれば距離が離れていても連携できるのだと感じた。(学校関係者)
- 何十年も日見地区に住んでいるが、今回のような日見峠を越えた子供たちの交流は初めて見た。中学生が日見への思いを日見地区以外の方へ語る姿に非常に感動した。(地域の方)
- 子供が夏休みに一生懸命長崎の魚を調べていた。高校生と関わり、成長したことを感じた。(保護者)

4 小中高の連携

(1) 連携体制の整備

子供の実態も地域の特色も異なる学校間の連携を図るために、長崎市では以下の手順で連携体制を整えていった。

①情報共有

小学校

中学校

○指定校の管理職・研究主任が集まり、各校のふるさと教育に係るカリキュラム、これから実施しようと考えている学習活動（年間計画）の情報を共有した。

②育成を目指す資質・能力に関する協議

小学校

中学校



○小・中学校でふるさと教育を通して育成したい資質・能力について協議する場を設け、3つの資質・能力を育成することにした。

○資質・能力は、難しい言葉にするのではなくどの学校・校種でも共有できる表現にすることで、学習活動のねらい（目的）が明確になるようにした。

（協議時に活用した資質・能力に関する構想図）

③高校への協力依頼

小・中学校

私立高校

教育委員会

県立高校

○指定校の校区内にある私立高校へは、学校から協力依頼を行い、学校が中心に連携体制を整えた。
○長崎市内には複数の県立高校がある。各県立高校では、「ふるさと教育体系図」が作成されており、ホームページ等に掲載している。それらを指定校が確認し、検討した資質・能力とのつながりを確認した。その後、取組等で連携できそうな県立高校へ教育委員会を通じて協力を依頼した。

④県立高校との顔合わせ（オンライン）

小・中学校

教育委員会

県立高校

○5月に県立高校との顔合わせをオンラインで実施した。各校での取組を紹介しながら、それぞれのふるさと教育に対する思いを共有した。
○具体的な連携については、顔合わせ後、直接学校間でやり取りを行いながら進めることにした。

⑤小中高の連携

中学校

小学校

高校

○小・中学校の管理職と研究主任が高校を訪問し、具体的な連携について協議を行い、具体的な学習活動の展開につなげた。

○指定校は、クラウド（Google Classroom）やC4thを活用しながら、双方の取組について情報共有を行い、連携を深めた。

(2) 連携をするうえで指定校が大切にしたこと

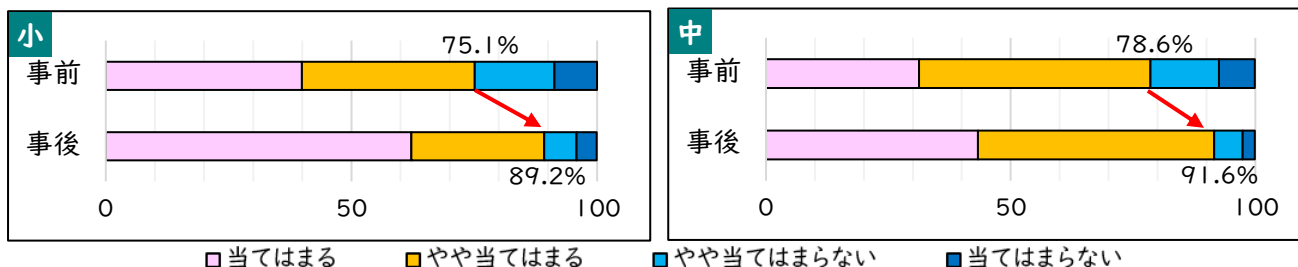
- 目的（育成を目指す資質・能力）を共有しながら、学習活動を計画する。
- 離れているからこそつながろうと意識し、職員間で連絡を取り合い、打ち合わせを進める。
- それぞれの地域のよさ（ひと・もの・こと）を共有する。
- 各学校区で協力を得ている地域の方との関わりや連携を大切にすること。

5 成果

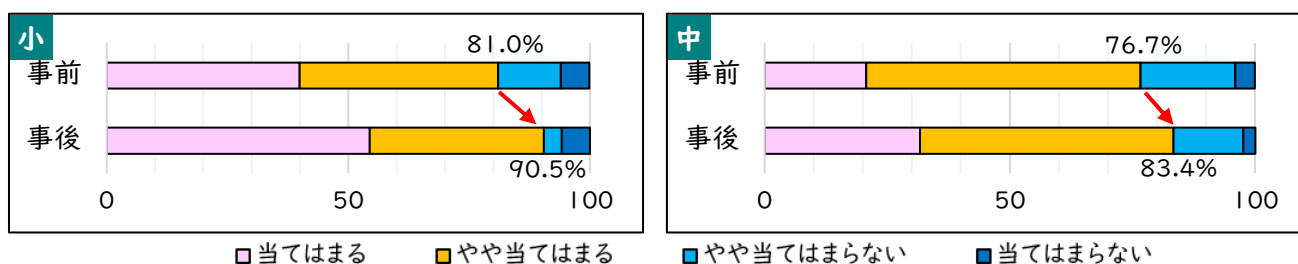
(1) 児童生徒の変容

指定校では、ふるさと学の実践に関わり、児童生徒に対して事前・事後のアンケートを実施し、下記の内容について一定の成果が見られた。

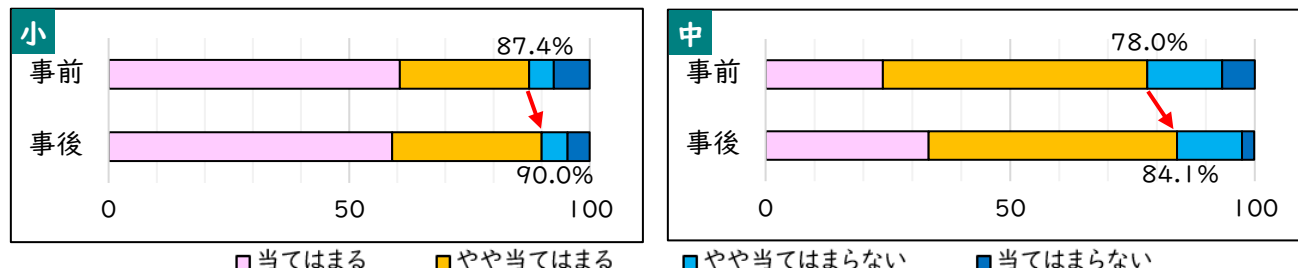
○自分たちが住む地域のよさを紹介できる



○自分たちが住む地域や学校のために今自分ができていることを考え行動することができる



○将来、大人になったとき、ふるさとのために役立つことをしたい



(2) ふるさと学協議会の総括



長崎市で行ったふるさと学協議会（令和7年2月）では、今回の研究について様々な視点から本事業に対する振り返りを出し合いながら、全体での総括を行った。本協議会で長崎市が取り組んだ「校区の垣根を越えたふるさと教育」は、指定校だけでなく、地域や研究協力校にとっても効果のある取組であることが明らかとなった。指定校では、今後も持続可能な形で実践していく所存である。

【ふるさと学協議会の総括から】

- 中学生や高校生との交流学习は、児童の自主的な探究学習につながっていった。（仁田佐古小学校）
- ふるさと学を追究していくと教師も生徒も次第に楽しくなった。中学校は総合的な学習の時間を要として教科横断的に実施することも大切だと感じている。（日見中学校）
- 高校としては、何とかして小・中学校と関わりをもちたいと思っていた。今回の協力依頼は本校としても非常にありがたかった。（研究協力校）
- ふるさと学は、子供たちのふるさと学かもしれないけれど、大人にとってのふるさと学でもあった。（地域）

II

地域の魅力ある教育資源を生かしたふるさと教育

島原市立三会小学校 島原市立三会中学校

研究協力校：長崎県立島原農業高等学校 長崎県立島原商業高等学校

三会小学校と三会中学校では、地域の豊かな教育資源に着目して取組を進めた。三会地区には、地域の代表的な産業である農業、豊かな歴史を今に伝える史跡や遺構、大切に守り受け継がれている伝統芸能などをはじめ、教育資源が数多く存在している。以前は、これらの資源を用いてそれぞれが独自に行っていたふるさと学習を、小・中・高、地域の関係者、島原市教育委員会から成る「ふるさと学推進協議会」を開催し、育成する資質・能力を軸にして年間計画に整理し、児童生徒・地域住民の協働による学びを充実させた。結果、児童生徒が地域をより深く理解し、地域のために行動しようとする姿が広く知られることとなり、「児童生徒は地域の担い手の一員である」という地域住民の認識が深まった。特に伝統芸能の継承においては、地域住民にとって児童生徒は伝統芸能を体験させる相手ではなく、共に継承活動を行う一員であるという認識が変わった。即ち、地域の魅力ある教育資源は、さらに質の高い教育資源として磨きがかかったのである。また、研究が進むにつれ、児童生徒にとって最も大切で、魅力ある教育資源は、地域に住まう身近な大人や高校生たちであることが明確になっていった。

このように、地域の教育資源を小・中・高の学びと結び付けて整理し、学習を展開したことが、地域と児童生徒が一体となって地域課題の解決に取り組む探究的な学びを充実させることにつながった。

I 育成する資質・能力

「ふるさとの魅力を知り、ふるさとへの思いを語れる児童生徒の育成」を目指して、小・中・高で連携を図り、各学年の発達段階や興味・関心に応じて「知る・体験する・比較する・課題を捉える・解決策を考える・貢献する・魅力を創り出す」という学習活動をすることで、ふるさと三会・島原を愛し、魅力を発信できる能力を身に付けさせる。

1 知識及び技能

- ・ふるさとの歴史、文化、自然環境を学び、地域の特徴や伝統的な行事、風習などの知識を深めることで地域に対する愛着心を育む。
- ・地域についての資料収集やフィールドワークなどを通じて、情報の収集方法やそれを整理・分析する方法を学び、調べまといめる技能を高める。

2 思考力、判断力、表現力等

- ・地域の環境問題や社会問題に対して課題を見つけ、それに対する解決策を考え、実行するための思考力と判断力を養う。
- ・地域の課題について自分の意見をまとめ発表する力、調査結果を分かりやすく伝える力や自分の考えを論理的に表現する力を高める。

3 学びに向かう力、人間性等

- ・地域の人々と交流し、他者の意見を尊重しながら、自分の考えを伝える力を育む。異なる世代や立場の人々との対話を通じて、共感力や協調性を育む。
- ・プロジェクト活動を通じてチームとして目標を達成するために役割分担や意見交換を行う経験を通して、協働する力やリーダーシップを養う。

2 年間指導計画

学年		生活科・総合的な学習の（探究の）時間等	◇関係機関等 □行事
高校	地域の産業や人材と出会うふるさと教育 地域の魅力を心と記憶に刻むふるさと教育	○商店街での実店舗実習「島商アップ」運営 ○ボランティア活動（ポップ作り指導：島商） ○地域とふれあう取組（島農） ○地域に貢献する取組（課題研究：島農）	◇島原商業高校 ◇島原農業高校 □しまばら江戸まつり
中3		○福祉体験学習 ○伝統芸能継承学習	◇島原土塙唄保存会 □しまばら江戸まつり
中2		○職場体験学習 ○修学旅行 ○高校調べ	◇島原市内事業所
中1		○ジオパーク学習 ○宿泊体験学習 ○郷土の特色体験学習 ○職業調べ	◇島原農業高校 ◇島原商業高校 ◇三会地区の農家 □大手門市
小6		○三会の歴史や文化について調べよう ・三会の歴史を学ぼうⅠ （ゲストティーチャー《以下、GT》、史跡巡り） ・三会の歴史を学ぼうⅡ （マップ・パンフレット等作成） ・三会の歴史を学ぼうⅢ（未来へつなぐ）	□三会神社例大祭 □鬼火（育成会）
小5		○三会の産業について調べよう ・三会の産業にはどんなものがあるのだろう ・三会の産業について調べようⅠ（GT・施設見学） ・三会の産業について調べようⅡ（GT・施設見学） ・三会の産業について調べようⅢ（発信）	◇各関係機関（畜産業、建設業、水産業） □三会神社例大祭 □鬼火（育成会）
小4		○三会の人に学ぼう ・すてきな三会の人Ⅰ（GT：民生委員・明生会） ・すてきな三会の人Ⅱ（GT：民生委員・明生会） ・三会のまちもりあげ隊！（交流活動・美化活動等） ・すてきな三会の人Ⅲ（GT：地区で活動している方）	◇民生委員 ◇老人会（明生会） ◇ボランティア（独居老人宅訪問） □三会神社例大祭 □鬼火（育成会）
小3		○ふるさと島原・三会を知ろう ・三会のよさを知ろう ・おいしい野菜を育てようⅠ・Ⅱ ①野菜作りをしよう（GT：JA／農家、中・高校） ②育てた野菜を調理しよう。 ・三会のよさを伝えよう	◇島原農業高校 ◇島原商業高校 ◇三会地区の農家 □鬼火（育成会）
小2		○まちたんけん ○あの人に会いたいな ○わたしたちの野さいばたけ ○作って あそぼううごく おもちゃ ○わたし たんけん	◇三会地区の農家 □景観形成運動 □奉納相撲（分校） □鬼火（育成会）
小1		○あそびにいこうよ ○ありがとうがいっぱい ○あきをたのしもう ○もっとあそびたいな ○ふゆをたのしもう ○生きもの大すき ○虫大すき	◇老人会（明生会） □景観形成運動 ◇奉納相撲（分校） □鬼火（育成会）

3 実践

(1) 三会小学校の実践

① 第1学年

ア もっとあそびたいな ー明生会との交流会

生活科「もっとあそびたいな」において、10月に地域の老人会である明生会の方をゲストティーチャーとして招き、昔遊びを教えていただいた。ゲーム遊びが主流になっている児童にとって、手製の竹トンボや凧、お手玉で遊ぶ経験は貴重で、夢中になって遊ぶ姿が見られた。また、親世代も昔遊びから遠ざかっていることから、保護者にも参加を募り、多くの参加があった。この交流会を通して、児童は、ふるさと三会に住む地域の方との出会いを体験し、「地域の方のすごいところ・すてきなところ」を見つけることで、地域の方への尊敬の念が芽生える機会となった。

イ もっとあそびたいな ー祖父母との交流会

長貫分校では、1月に祖父母との交流会を行った。児童が、それぞれの祖父母に招待状を書き、はねつき・めんこ・おはじき・あやとり・お手玉・けん玉の6種類の昔遊びを教えてもらった。「〇〇君のおばあちゃんに教えてもらってできるようになった」「〇〇ちゃんは、お父さんにそっくりね」などの会話も聞かれ、昔遊びを教えてもらうだけでなく、地域の方との交流を深める機会となった。



② 第2学年

ア まちたんけん

三会の町で働いている人たちについて調べる活動を通して、そこに暮らしたり、働いたりする人々の工夫や町のよさに気付く学習をした。三会の町を探検し、気になる所を出し合い、「島原ソーイング」「三会郵便局」「JA 島原三会支店」の3か所に分かれて見学をした。グループごとに発見したことや気付きをまとめて発表をした。お互いに発表を聞き合うことで、自分たちが見学していない場所で働く人々の工夫やよさに気付き、三会の町の魅力を知ることができた。



イ わたしたちの野さいばたけ

長貫分校では、野菜を育てる学習の中で、「どんなお世話をしたらいいのかな」「どうやって育てればいいのか」という問いから、農家を営む保護者に聞く学習を行った。

保護者をゲストティーチャーとして招き、ミニトマトのわきめとり、風揚げなど世話の仕方を教えていただいたことをもとに毎日お世話を行った。数名の保護者の方が何度か来校し、世話を手伝ってくださったこともあり、多くの野菜が育ち、収穫の喜びを分かち合うことができた。「野菜を育てることは楽しい」「おいしい野菜が育ってうれしい」「大変なこともあるんだな」と改めて農家の方の仕事のすごさを感じることができた。



③ 第3学年

ア ふるさと三会・島原を知ろう ―おいしい野菜を育てよう

児童は、三会地区には、どんな行事や特産物があるかを出し合い、特に野菜の栽培がさかんであることを学習した。そこで、自分たちもおいしい野菜を作りたいという思いをもち、栽培活動に取り組んだ。1学期に、三会の特産物である大根とにんじんの種植えを行った。しかし、芽が出なかったり、葉を害虫に食べられたりするなど、育てることができなかった。その反省をもとに、おいしい野菜を育てるためにはどうすればよいのかを調べ、土づくりや、水やり、害虫駆除が必要なことがわかった。調べたことをもとに、2学期に再び大根とにんじんの栽培に取り組んだ。

農家の方から、水の管理やさまざまな作業を行うことで、おいしい野菜ができることや大変さを教えてもらい、何気なく食べている野菜の生産者への感謝の思いをもつことができた。

また、島原農業高校や農家の方、中学生と連携し、中学校の畑でトウモロコシ栽培に取り組んだ。種まきや間引き、収穫を共同で行った。収穫の際は保護者と一緒に収穫し、試食会を開いた。自分たちで栽培したことから「甘い、おいしい」といった感想だけでなく、様々な協力に対しての感謝の思いをもっていた。また、これらの活動を通して、人々の食を支えている三会の農業を誇りに思う気持ちが高まった。



④ 第4学年

ア 三会の人に学ぼう ―すてきな三会の人Ⅰ

明生会の方が生き生きと活動している様子を知り、地域への貢献活動やサークル活動などいろいろな活動をされていることがわかった。その中で自分たちも参加できないかという思いをもち、いくつかの交流活動を行った。

まず、プランターに花の苗を植える活動を行った。明生会の方の教えを受けながら植えることができた。その後、明生会の方がされている輪投げリレーをして交流を深めた。

次に、サークル活動で行われているペタンクの交流を行った。三会地区のペタンクチームは、全国大会に出場するほどの腕前である。明生会の方の御指導のもと、徐々にルールを理解したりボールの投げ方のコツをつかんだりしながら、楽しくゲームに取り組むことができた。



イ 三会の人に学ぼう ―すてきな三会の人Ⅱ、三会のまちもりあげ隊！

高齢者である明生会の方は、徐々に活動を縮小されている。そこで、高齢者の方はどのような状態にあるのか、社会福祉協議会の方に来ていただいて、高齢者体験と車いす体験を行った。高齢者の方は、体が動かしづらくなったり、目が見えづらくなったりして大変だということを理解し、高齢者の方にどのように接していけばよいか考えることができた。この学びをもとに、「三会地区子どもボランティア委員」の活動に有志が参加した。民生委員児童委員とともに、一人暮らしの高齢者宅に花などを届け、交流をすることができた。

⑤ 第5学年

ア 三会の産業について調べよう ―三会の産業にはどのようなものがあるだろう

より深く三会地区の産業について知るため、1学期に地域代表の方に向けたアンケート調査を作成・実施した。結果、自分たちの住んでいる地域には、農業以外にもたくさんの産業があることに気付くことができた。2学期から、調べる産業を以下の3つの産業（畜産業、建設業、水産業）に絞り、学習を進めた。

- ・畜産業（田浦畜産）・・・島原和牛、島原牛乳の生産
- ・建設業（稲吉建設）・・・島原道路建設、畑の区画整理
- ・水産業（漁業組合）・・・有明のり、ジオあわびの生産



イ 三会の産業について調べよう I・II ―施設見学

田浦畜産訪問を通して、牛の世話の仕方、生き物相手に仕事をするの大変さを学んだ。また、給食で飲んでいる島原牛乳は田浦畜産で生産されていること、牛のふんは堆肥となり、農業の役に立っていることを知り、より身近に感じることができた。更に、子牛を買いに北海道、熊本、佐賀、福岡、宮崎など日本の各地を飛びまわり、東京にブランドを立ち上げようとしていると聞き、「こんな人が三会にいるなんてすごい」「三会の畜産業がもっと有名になってほしい」という意見が出てきて、三会の畜産業に誇りを持つようになった。

稲吉建設訪問を通して、実際に工事をする時に使う道具や工事の様子、工夫について学んだ。道路だけでなく、橋や家、海、牛舎の工事もすると知り、幅広い仕事内容に驚く様子があった。そして、三会地区には40社の建設業があると聞き、建設業も三会の誇れる産業であることを知った。また、「自分が造った建造物が、未来もずっと地図に残すことができるやりがいのある仕事である」という思いを聞き、「建設業ってかっこいい」「自分達の生活は建設業の方のおかげで成り立っている」と意見が出てきて、三会の建設業についても誇りを持つようになった。

⑥ 第6学年

ア 三会の歴史や文化について調べよう ―課題設定・オリエンテーション

社会科の学習で歴史の学習が始まることもあり、オリエンテーションとして「三会かるた」に取り組んだ。このことで、かるたの中にある歴史的なもの、例えば、城や人物などに関心を持った。

次に、もっと詳しく三会について知るために、「三会の歴史について知ろう!」と課題を設定した。そして、この時に出会った「ふるさと三会」に残る歴史や史跡について、今、自分たちが知っていることを整理し、まとめた。これをもとに市社会教育課文化財保護推進室室長（以下、室長）から座学を通して、詳しく講義をしていただき、三会に多くの歴史的遺跡、遺構があることを知ることができ、興味関心を高めた。

イ 三会の歴史を学ぼうⅠ ー史跡巡り

学校を中心に東側と西側に分けて、室長の説明を受けながら史跡を巡った。



史跡巡りを振り返り、それぞれが興味を持った内容ごとに、城・神社・遺跡・偉人の4つのグループを作った。フィールドワークで学んだこと、自分たちが調べたことを各グループでスライドにまとめた。そのスライドをもとに、「ふるさと学」発表会に向けて、プレゼンテーションの準備を進めた。発表の役割分担、発表原稿作成など、グループで相談しながらまとめることができた。

発表会では、地域の方や保護者など多くの方にクイズや寸劇を交えながら、作成したスライドを用いて紹介することができた。パネルディスカッションやグループ協議では、「より多くの方に三会に残る歴史を知ってもらいたい」「そのために『目立つ看板』や『キャラクター』を作って表示してはどうか」と自分たちが考えたことを伝えたり、ふるさとのよさに気付いたりすることができた。

(2) 三会中学校の実践

① 第1学年

ア 郷土の特色体験学習

三会地区の魅力である盛んな農業に触れる体験を行った。8月から10月にかけて先祖代々から受け継いだ農業を次の若い世代に引き継いで行くために立ち上げられた「Bunko Farms」の皆様や島原農業高校の先生方や生徒の指導のもと、トウモロコシの栽培をした。この活動は、本研究の大きな二本の柱である「地域の魅力を心と記憶に刻むふるさと教育」、並びに「地域の産業や人材と出会うふるさと教育」にあたる。

水やりや間引き、追肥や摘心などについて、指導いただき、中学生は夏休み中も、毎日、世話に取り組んだ。

本年度は三会の魅力を発信するために10月12日（土）に開催された大手門市で、島原商業高校・島原農業高校の合同ブースの一部を借りてトウモロコシの販売を行った。

販売に先駆けて、7月9日（火）に島原商業高校の生徒に、販売する際の注意点や魅力の伝え方について指導をいただいた。販売活動当日は有志の生徒で、トウモロコシを直接販売し、来場された多くの方から温かい言葉をいただき、心に残る学習となった。



② 第2学年

ア 職場体験学習

9月11日（水）から13日（金）の3日間、島原市内24カ所で福祉・公務・教育・製造業・サービス業・小売業の事業所ごとに分かれて職場体験学習を行った。この活動は、大きな2本の柱の一つである「地域の産業や人材と出会うふるさと教育」にあたる。学習を通して、仕事の大変さや喜び、様々な方とコミュニケーションをとる難しさ、社会人としてのマナーの在り方などについて考えるよい機会となった。また、仕事をして、自分たちを育ててくれる家族へ感謝の気持ちをもつ生徒も多く見られた。その後、「わかりやすく人に伝える」ということをテーマにして事業所ごとにスライドにまとめ、学年で発表会を行った。



③ 第3学年

ア 伝統芸能継承学習

三会地区の伝統芸能である「土塙唄」の演技に、「島原土塙唄保存会（以下、保存会）」の方と連携し、7月から学習を行った。この学習は、大きな2本の柱である「地域の魅力を心と記憶に刻むふるさと教育」、並びに「地域の産業や人材と出会うふるさと教育」にあたる。活動を始めるにあたって、保存会の方を招いて、「土塙唄」に関する講話と唄の実演をしていただいた。土塙唄は建物を建築するときの基礎工事の土固めをする際に歌われていた作業唄で、祝い唄である。演技の練習では、引き手、根取り、踊り子、太鼓、大正琴、歌い手の各パートに分かれて指導していただいた。島原城築城400年記念事業の一環として10月12日（土）に島原城で開催された「しまばら江戸まつり」のオープニングイベントに、保存会の方と有志の生徒が参加した。



(3) 「ふるさと学」発表会

11月22日（金）に「ふるさと学」発表会を島原市有明総合文化会館で開催した。

オープニングセレモニーとして、三会中学校3年生が保存会と一緒に土塙唄の発表を行った。参観者、児童生徒の中には初めて鑑賞し、目を輝かせていた者もいた。小学生や中学1、2年生の中には、自分が将来体験する土塙唄に憧れを抱くことができた振り返る者もいた。

研究概要の説明では、三会小・中学校の研究主任が、小・中・高が一体となったふるさと教育事業「ふるさと学」について説明を行った。



児童生徒発表では、はじめに、三会小学校4年生が、「やっちゃすてきな三会の人」と題して発表を行った。明生会との交流や三会小学校の先輩たちにもすごい人がいることなど、体を使って、楽しく元気に発表した。また、NHKの番組の企画の中で、かつての6年生が作詞、坂田おさむ氏が作曲した「さんかい会える町」を、会場を巻き込んで歌って、盛り上げた。

次に、6年生が「しっちゃんね 三会ん歴史」と題して発表を行った。三会お宝発見と称した座学やフィールドワークを通して学んだ歴史や人物について学んだことを中心に、三会地区の各所に歴史遺構があることを知り、三会について誇りを持つことができたことを堂々と発表した。

最後に三会中学校1年生が、「三会はよかとコーン～協働プロジェクト」と題して発表を行った。農家の方に学びながらトウモロコシの栽培を小学校3年生や島原農業高校生と一緒に実施したことや、収穫したトウモロコシを販売するために島原商業高校生からポップづくりを学んだことを中心に発表した。発表の中では、実際に大手門市で販売した時の様子を実演しながら、実感を込めて発表した。

小・中学校共にステージで発表しなかった学年は、会場のホールに学習の足跡を掲示することで、学習したことを参観者に伝えた。

会の後半はパネルディスカッションとグループ協議を行った。パネルディスカッションでは、地域の方（3名）、小・中の児童生徒（4名）・研究主任（2名）の計9名のパネラーが「ふるさと三会の魅力を広げ、みんなでつくる明るく元気な三会の町」（発信と町づくり）というテーマのもと、会場の参観者や児童生徒と一緒に意見交流を行った。



三会地区を巻き込んだふるさと教育の在り方、学校教育における三会地区や産業の活用の在り方、地区の行事などの活発な意見が飛び交った。また、グループ協議では、小中の児童生徒（2名）に加え、島原商業高校生や地区の代表者の方（2名）、島原市立小・中学校の教員といった世代や立場などが違うメンバーで、「ふるさとについてどのような学びがあったのか、そして、どのような思いを持ったのか」について、積極的で建設的な意見が交わされた。

最後には、一連のふるさと教育に関する研究について、県教育庁義務教育課から以下の様な指導助言があった。

- ・予測困難な時代にあっても、これからの社会の未来をしっかり描き、それに向かって協力しながら社会の課題解決に向かって行動していくことが大切である。行動する大人の背中を見て、子供たちは未来に希望をもち、生まれ育ったふるさとに感謝し、誇りをもつものである。そんな大人があふれる地域の人々や地域の魅力を、ふるさと学を通して学んでいくことが重要である。

- ・地域の中でしっかりとふるさと教育を学んできた子供たちは、ふるさとで生きたり、遠くにいてもふるさとを応援したりするようになる。したがって、学校だけではなく、地域の方と協働して子供たちを育てていくことが大切である。

4 小中高の連携

(1) 小・中・高の連携

小学校第3学年と中学校第1学年がトウモロコシ栽培において、種まきや間引き、収穫を小・中・高、地域関係者と協働で行った。事前にふるさと学推進協議会で、協働的に取り組む内容や期日について確認を行った。その後、教頭間から担当職員同士のやり取りに段階的に移行することで、実際の児童生徒の学びの在り様を擦り合わせながら意見交換をすることができた。このことで、よりよい学びを創出する協働実践につなげることができた。

(2) 中・高の連携

① 島原農業高校との連携

- ア 中学校第1学年の「総合的な学習の時間カリキュラム」の説明を行い、スケジュールや栽培する作物について意見交換を行った。(5月)
- イ 畑のマルチ張りを高校の教諭・生徒と中学校の代表者で行った。(8月)
- ウ 種まきや間引きの作業を小・中・高共同で行い、高校生は、総合的な探究の時間の学習として中学校の畑の土壌調査も行った。(8月以降)
- エ 収穫作業を小・中・高共同で行った。(11月)

② 島原商業高校との連携

- ア 中学校第1学年の「総合的な学習の時間カリキュラム」の説明を行い、スケジュールや販売場所、方法について意見交換を行った。(5月)
- イ 販売に向けて、高校生に販売用ポップの意味や効果、作成のコツなどについて講義をいただき、その後、グループに分かれて中学生に高校生がポップ作りの指導を行った。(7月)

③ 大手門市での販売

島原商業高校・島原農業高校の合同ブースを一部借用し、中学校第1学年の生徒の有志がトウモロコシの販売を行った。

5 成果

- ふるさと教育の視点でカリキュラムを見直すことで、育成したい資質・能力が明確になった。（小・中共通）
- 2年間の研究を通して、児童生徒の疑問や探究心を大切にしたカリキュラムを設定することで、一層主体的な学びになることが分かった。（小・中共通）
- 情報発信力に関しては課題意識を持って取り組ませることで、児童生徒の意欲を高めることができた。（小・中共通）
- 「地域の魅力を心と記憶に刻むふるさと教育」
 - ・地域の方の協力を得ながら、まち探検や歴史探訪といった学習で地域に出かける、野菜を育てるなど、実感を伴って「知る」「体験する」ことができた。（小）
 - ・郷土の特色体験学習では、地域の方や地元の高校生から専門的な知識・技能を学び、地元の特産物を育て販売し、自分の考えを表現し深める活動を通して、「情報を収集し、活用して発信する力」を身に付けることができた生徒が一定数見られた。また、地域や高校と交流することで三会地区の次世代を担う持続可能な人材の縦のつながりをつくることができた。（中）
- 「地域の産業や人材と出会うふるさと教育」
 - ・地域の産業に関わる方や老人会との交流、分校の収穫祭を含め、地域関係者の思いを聞くことで、地域に対する思いや優しさを感じたり、尊敬や憧れを抱いたりすることにつながり、そこから「ふるさとを愛する心」を育むことができた。（小）
 - ・職場体験学習、福祉や伝統芸能の体験学習で、地域の方との交流を通して、持続可能な取組を創り出し、地域と協働することで、「主体的に課題解決に関わる力」を身に付けることができた生徒が一定数見られた。（中）
 - ・生徒のアンケート調査の自由記述には、「ふるさとの魅力の再発見」「地域とのつながりの強化」「高校生への感謝」「今後のふるさとへの強い思い」が記されており、ふるさと学を学んだ成果が十分に感じられた。（中）



Ⅲ

小・中の学びの系統性を生かしたふるさと教育

大村市立三浦小学校 大村市立鈴田小学校 大村市立大村小学校 大村市立玖島中学校
研究協力校：長崎県立大村高等学校 長崎県立大村城南高等学校
長崎県立大村工業高等学校 向陽高等学校

玖島中学校は、令和3年度から地域の教育資源を生かした起業体験学習に取り組み、模擬会社の設立、地域の特色を生かした商品の企画・開発、そして学習成果の発表の場である『くしマルシェ』で保護者、地域に向けた販売を行ってきた。また、中学校区の三浦小学校、鈴田小学校、大村小学校は、それぞれに地域の特性を踏まえながら、生活科や総合的な学習の時間を中心にふるさとを題材とした学びを充実させてきた。今回、小・中・高が一体となったふるさと学習の取組により、学校間で育成する資質・能力が共有され、小学校では、地域の方々との温かな触れ合いや体験を通じた協働活動を重ねながら、高校との交流へと活動を広げた。また小・中学校が互いのカリキュラムを見直す中で学習内容の重なりが分かり、中学校の学習内容の精選と地域貢献活動という新たな取組が生まれ、9年間を通じた学びの連続性を実現した。系統的なふるさと学習の実践によって、子供たちの心にはふるさと大村への愛着と誇りが着実に育まれた。

4校は、今後もふるさとに生きた人々の思いを継承しながら、さらなる地域発展の実現に向けたふるさと学習を継続していくことを確認した。

Ⅰ 育成する資質・能力

①（知識及び技能）

地域には、まちづくりに携わる人々の取組や思いがあり、様々な視点から自分たちが住む地域にはよさがあることを理解する。

②（思考力、判断力、表現力等）

課題解決に向け、計画を立て、必要な情報を様々な手段を用いて収集・整理しながら、相手や目的に応じてわかりやすくまとめ、伝えることができる。

③（学びに向かう力、人間性等）

相手や仲間の気持ちや考えを大切に、自分のよさや特徴を生かし、仲間や地域の方々と協働しながら積極的に活動や社会に参画しようとする。

2 年間指導計画

この研究を通して、小学校でも地域やふるさとについて学習していることが多く、「ふるさとを知る」という学習には、中学校の学習と重なりがあることが分かった。そこで、3つのテーマを小学校と共有し、各学校で行っているふるさと教育を、学年に応じ意識させることにした。

小学校低学年から中学年にかけては、様々な教科や総合的な学習の時間で「ふるさとを知り」、高学年から中学1年生にかけては、農作物などを作るだけでなく、地域や校種間とつながりを作ることを「ふるさとをつくる・創る」とし、そして中学2・3年生では自分たちの力で地域を活性化させたり、貢献したりするよう「ふるさとを拓く」と設定した。また中学校は、小学校と学習内容を共有し、精選したことで、より時間に余裕ができ、地域と連携する活動や内容へと広げることができた。

以上の内容をまとめ、カリキュラムを作成した。上段には、大まかな学習や活動内容、下段には、各

学校ごとの学習内容を示し、9年間の発達段階に応じたふるさと教育の学びを可視化した。今後も、年度始めや終わりに4校のふるさと教育や総合的な学習の時間の担当が連絡を取り合い、変更や追加等の確認をしていく。

また、3校の小学校は各校の特色があり、ふるさとに関する学習内容も様々である。そこで、各学校の学習内容を共有できるよう、今年度の小学校教科書改訂に伴い、総合的な学習の時間だけでなく、教育課程全体を通してふるさと教育を意識して行えるように、別葉を作成した。未完成であるが、授業を行いながら気付くこともあるため、今後も更に内容を充実させていく。

作成したカリキュラムは、玖島中学校ホームページにてご覧いただきたい。



3 実践

(1) 小学校の実践

①三浦小学校

【みかん作りを通した実践】

三浦小学校は、昔からみかん作りを行っており、学校や地域の方々と一緒に年間を通して活動を行っている。みかんを栽培し、収穫するだけでなく、販売したり、加工したりと様々な活動へ繋げている。地域や異校種と関連した取組は、以下のとおりである。

- みかんの栽培・・・地域の方からのサポート
- みかんの収穫・・・日曜日に行い、保護者や地域の方も参加
- みかんの加工・・・大村城南高校の生徒と一緒に、収穫したみかんを使ったゼリー作り
- みかんの販売・・・収穫したみかんを学校を通じて販売
児童からの御礼の手紙などを同封
- みかんの提供・・・商品開発のために玖島中学校に毎年提供

みかんを教材としているが、ふるさとや学校とのつながりをたくさん作ることができた。



②鈴田小学校

【米作りを通した実践】

鈴田小学校は、5年生が米作り体験を行っている。毎年、地域の米作り名人を招いて、田植えから収穫までを行っている。収穫した米は、5年生児童の保護者がゲストティーチャーとなり、各班で見守り、指導を行いながら、児童が調理した。そして調理したお米を米作り名人やいつもお世話になっている地域の方々に振る舞った。米作りの大変さや後継者不足の話を聞いた児童の中には、「自分が米作りを継がなければならない！」という思いをもつ児童もいた。

【ふるさとの部屋作り】

鈴田小学校では空き教室を利用し、「ふるさとの部屋」を開設した。どのような部屋にするかを児童たちが考え、具現化できたことで、より鈴田の歴史について関心をもつ児童が増えた。今後は、この部屋をコミュニティ・スクールの活動場所として、地域にも開いていく。



③大村小学校

【人を生かした実践】

大村小学校は、三浦小、鈴田小と比べ、市街地に位置しており、商店などの第三次産業が多い地区である。その地の利を生かし、様々な学習にゲストティーチャーを招いている。以下がその例である。

○なまこの稚魚放流体験・・・県央水産業普及指導センター（3年生）

○平和学習の講話・・・・・・・・・・高校生平和大使（4年生）

長崎原爆被災者協議会（6年生）

○大村音頭の伝承・・・・・・・・・・大村青年会議所スタッフ（5年生）

○課外クラブ・・・・・・・・・・茶道の指導者

このほかにも、福祉体験などで外部の指導者を招いており、ふるさと教育に関わること以外の学習でもお力添えをいただいている。そして、これが単年で終わらず継続した活動にできるように、人材バンクを作成した。担当が変わっても、地域の方々の力や知恵を借りながら、地域に開かれた学校・教育活動を目指している。

《人材バンク一例》

ふるさと教育 令和6年度 大村小学校 単元と資料の関連表					
	実施月	教科	単元名	内容	資料・人材・場所など
例					
1年生	10月	生活科	たのしいあきいっぱい こうえんであきをさがそう	くばらこうえんであきをさがそう	大村市河川公園課53-4111
	11月	生活科	たのしいあきいっぱい	大村公園を探検して自然の様子の変化に 気づく	大村市河川公園課53-4111 造園組合のゲストティーチャー
2年生	10月	生活科	みんなであそぼうまちのしせつ	ミライオン図書館見学	ミライオン図書館48-7700
	11月	生活科	もっとなかよしまちたんけん	地域のお店の探検	※地域のお店21店舗を探検 ※詳しくは学年フォルダ内
3年生	4～5月	総合	学校の周り再発見 ～大村公園の生き物について～	報告書作成	大村公園
	7月	総合	学校の周り再発見 ～大村市の漁業について(なまこ 放流体験)～	感想文交流	県央水産業普及指導センター (講話をしていただきました) 寺島にてなまこの稚魚の放流体験
	10～12月	総合	学校の周り再発見 ～黒門・五教館について～	ポスター作成	大村市歴史資料館 (講話資料をいただきました)

【ふるさとロード作り】

「ふるさとロード」や「ふるさと自慢の木」と称した掲示物を作成し、通年で掲示した。児童全体に様々なふるさととの繋がりを意識させるような取組の土台を仕組むことができた。また、「大村くろもんまつり」で学校を開放した際には、祭りの参加者や地域の方々にも見ていただき、地域でふるさとを感じることができる場所となっている。

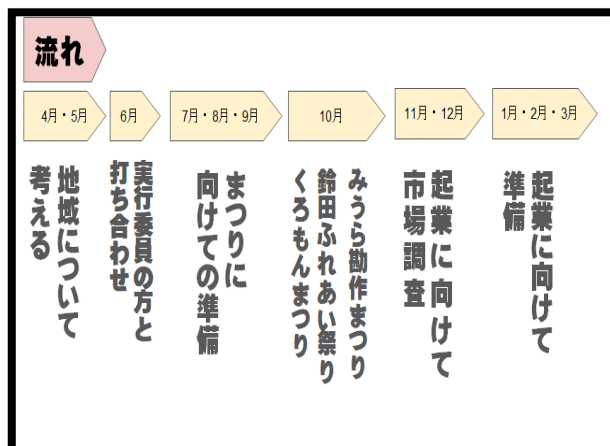


(2) 中学校の実践

① 1年生くふるさとのよさを知る> 各地区のまつりへの参画

三浦小校区、鈴田小校区、大村小校区（以下「各地区」と記載する）では、まつりが開催されている。これまで、各地区のまつりに来場者として参加していた生徒たちが、まつりに参画し、盛り上げる側になり、「地域の方々と関わることで地域の活性化に繋がる」と理解することを目指した。

1年間の流れは、右記のとおりである。その中から、主な活動を紹介する。



○実行委員との打ち合わせ

6月18日に実行委員の方との打ち合わせを玖島中学校で行った。各地区の実行委員の方に来ていただき、以下の流れで祭りでの活動内容を確認した。

地区の実行委員の方々から、まつりに係る説明

↓

生徒によるプレゼンテーション

↓※自分たちがまつりでやりたいことを伝える。

質疑応答

この打ち合わせで決まったことをもとに、準備を行った。



○祭りへの参画・・・実践内容のまとめ

まつり名(小学校)	日にち	係分担	実践例
大村くろもんまつり (大村小)	10月19日 (土)	イベント班 ステージ班 昔遊び班	劇 スタンブラリー ガチャ ピンポンカップイン 昔遊び
鈴田ふれあいまつり (鈴田小)	10月20日 (日)	昔遊び班 イベント班 広報班	劇 クイズ ダルマ落とし スタンブラリー くじ引き
みうら勤作まつり (三浦小)	10月27日 (日)	広報班 ステージ班 イベント班 昔遊び班	三浦歴史クイズ お手玉 ボーリング 糸くじ かるた

まつりへの参画を通して、地域の方とのつながりを獲得し、今後も地域の方との連携を継続していく思いを強くするとともに、今後の協力を依頼する機会とすることもできた。



② 2年生くふるさとを創る> 起業体験学習

現在の3年生が卒業生から引き継いだ5つの模擬株式会社を今年度は2年生が引き継ぎ、起業体験学習を実施した。事業説明会、株主募集会は各小学校区内で実施し、各地区に居住する生徒が担当することにより、地域の生徒が地域の方々と関わる機会を充実させた。

起業体験学習に関わる流れと概要は、下記のとおりである。

時期	内容	概要
1年生 3学期	株式についての学習	専門の教材を用いて、各クラスで株式や会社には様々な組織や役割があることを学習する。
	会社の仕組みについての学習	
	起業案決め	各地区の特色を生かした起業案を考え、コンペティションを行い、各地区で商品やサービス内容を決定する。
2年生 1学期	会社組織決め	各会社で担当部署を決定する。 【例】 各社で異なる 社長 副社長 総務部 商品開発部 営業部 経理部 等
	協力企業にプレゼンしよう	地域企業の方のアドバイスを受けながら商品案をより現実的なものに改良する。
	商品プレゼン会	
2年生 2学期	事業説明会・株主募集会に向けて	各地区で、各社の理念や販売会で売り出す商品の説明を行い、地域住民の方からの理解を得て、資金を集める。
	事業説明会・株主募集会	
	販売会へ向けての準備	玖島中学校の体育館で、各社で作った商品を販売する。
2年生 3学期	販売会「くしマルシェ」の実施	販売だけでなく、会場作りや会場整理など生徒たちですべての運営を行う。
	株主総会	得た利益の還元方法などについて提案し、承認を得る。

令和6年度の商品

会社名	Cherry sage	OmuLove	Protagonist	tribus	ラカト
商品	カレンダー	カードゲーム	絵はがき コーヒーなど	みかんパウンド ケーキなど	いちごパン・マ リトツツオなど

販売会「くしマルシェ」は、新聞へのチラシの折り込みや校区各小学校の6年生の招待等により、大きな集客効果があり、約500名の来客があった。なお、この模様は、長崎新聞やケーブルテレビ等のメディアで紹介され、本研究の取組を広く周知することとなった。



販売会後は株主総会において、各社の事業報告を行う。今年度は株主へ、株券と返戻金とを引き換える予定にしている。

なお、利益の使途については、令和5年度の事例を紹介する。

○各会社それぞれ寄付

会社名	Cerry sage	OmuLove	Protagonist	tribus	ラカト
寄付 内容	大村市観光 コンベンション 協会へ寄付金	大村市ふるさと づくりへ寄付金	大村小校区の 保育園へ絵 本を寄付	三浦住民センタ ーへブックラック を寄付	鈴田小へ校 旗を寄付

○能登半島地震義援金

○玖島中学校入口看板補修

○今年度の地域貢献学習の資金

○今年度の起業体験学習の資金

各社で考え、地域、学校、ふるさとに関わる場所に必要
な物を届けることができ、この全ての学習活動を通して、
起業家精神を養うだけでなく、ふるさとの未来を担う気持
ちを育てることができた。



③ 3年生<ふるさとを拓く>地域貢献活動

ふるさと教育、キャリア教育の観点から、生徒が地域貢献を目的とした活動に主体的、協働的に
取り組むことで、よりよいふるさとの未来を創造しようとする意欲を喚起し、地域に貢献すること
の意味を自分との関わりの中で考えることを目標とした。このことに加え、将来それぞれの立場や
場面で積極的に社会に参画しようとする生徒を育成するというねらいに基づき、各地区での地域貢
献活動を実施した。

地域貢献活動では、各地区の生徒が居住地域へ出向き、こども園や福祉施設でレクリエーション
を企画して地域の方々との触れ合う活動を実施した。また、学校運営協議会委員や町内会長の皆様
にご協力いただき、公園や海岸の清掃活動を継続的にを行い、地域をきれいにすることで、育ててく
れた地域への恩返しができたと実感する生徒が大多数であった。地域のニーズに応える継続的な活
動を目指して実施したが、なかなか地域からの要望が得られなかったことが来年度の課題である。

○地域貢献活動（年4回実施）

- ・令和6年 7月 5日（金）
- ・令和6年 9月 5日（木）
- ・令和6年10月11日（金）
- ・令和7年 2月27日（木）28日（金）



玖島中学校地域貢献活動

本校は、ふるさと教育の一環として、地域貢献活動を実施しています。この活動を通じて、生徒が地域に貢献することの意味を自分との関わりの中で考えることを目標としています。このことに加え、将来それぞれの立場や場面で積極的に社会に参画しようとする生徒を育成するというねらいに基づき、各地区での地域貢献活動を実施しました。

【地域貢献活動の例】

- ・ふるさと学習の一環として、地域貢献活動を実施しています。
- ・地域貢献活動を通じて、生徒が地域に貢献することの意味を自分との関わりの中で考えることを目標としています。
- ・このことに加え、将来それぞれの立場や場面で積極的に社会に参画しようとする生徒を育成するというねらいに基づき、各地区での地域貢献活動を実施しました。

【活動の目的】

- ・ふるさと教育の一環として、地域貢献活動を実施しています。
- ・地域貢献活動を通じて、生徒が地域に貢献することの意味を自分との関わりの中で考えることを目標としています。
- ・このことに加え、将来それぞれの立場や場面で積極的に社会に参画しようとする生徒を育成するというねらいに基づき、各地区での地域貢献活動を実施しました。

【活動の成果】

- ・ふるさと教育の一環として、地域貢献活動を実施しています。
- ・地域貢献活動を通じて、生徒が地域に貢献することの意味を自分との関わりの中で考えることを目標としています。
- ・このことに加え、将来それぞれの立場や場面で積極的に社会に参画しようとする生徒を育成するというねらいに基づき、各地区での地域貢献活動を実施しました。

玖島中学校地域貢献活動 企画案申し込み用紙

ご所属校（個人でも可）

代表者（参加者）

地区

電話番号

希望人数

必要経費

活動予定期間

活動予定日

活動予定時間

活動予定場所

活動予定内容

活動予定費用

活動予定費用の内訳

活動予定費用の負担割合

活動予定費用の負担方法

活動予定費用の負担時期

活動予定費用の負担先

活動予定費用の負担先住所

活動予定費用の負担先電話番号

活動予定費用の負担先メールアドレス

活動予定費用の負担先FAX番号

活動予定費用の負担先郵便番号

活動予定費用の負担先市区町村

活動予定費用の負担先国

活動予定費用の負担先海外

活動予定費用の負担先その他

活動予定費用の負担先備考

活動予定費用の負担先備考2

活動予定費用の負担先備考3

活動予定費用の負担先備考4

活動予定費用の負担先備考5

活動予定費用の負担先備考6

活動予定費用の負担先備考7

活動予定費用の負担先備考8

活動予定費用の負担先備考9

活動予定費用の負担先備考10

活動予定費用の負担先備考11

活動予定費用の負担先備考12

活動予定費用の負担先備考13

活動予定費用の負担先備考14

活動予定費用の負担先備考15

活動予定費用の負担先備考16

活動予定費用の負担先備考17

活動予定費用の負担先備考18

活動予定費用の負担先備考19

活動予定費用の負担先備考20

活動予定費用の負担先備考21

活動予定費用の負担先備考22

活動予定費用の負担先備考23

活動予定費用の負担先備考24

活動予定費用の負担先備考25

活動予定費用の負担先備考26

活動予定費用の負担先備考27

活動予定費用の負担先備考28

活動予定費用の負担先備考29

活動予定費用の負担先備考30

活動予定費用の負担先備考31

活動予定費用の負担先備考32

活動予定費用の負担先備考33

活動予定費用の負担先備考34

活動予定費用の負担先備考35

活動予定費用の負担先備考36

活動予定費用の負担先備考37

活動予定費用の負担先備考38

活動予定費用の負担先備考39

活動予定費用の負担先備考40

活動予定費用の負担先備考41

活動予定費用の負担先備考42

活動予定費用の負担先備考43

活動予定費用の負担先備考44

活動予定費用の負担先備考45

活動予定費用の負担先備考46

活動予定費用の負担先備考47

活動予定費用の負担先備考48

活動予定費用の負担先備考49

活動予定費用の負担先備考50

活動予定費用の負担先備考51

活動予定費用の負担先備考52

活動予定費用の負担先備考53

活動予定費用の負担先備考54

活動予定費用の負担先備考55

活動予定費用の負担先備考56

活動予定費用の負担先備考57

活動予定費用の負担先備考58

活動予定費用の負担先備考59

活動予定費用の負担先備考60

活動予定費用の負担先備考61

活動予定費用の負担先備考62

活動予定費用の負担先備考63

活動予定費用の負担先備考64

活動予定費用の負担先備考65

活動予定費用の負担先備考66

活動予定費用の負担先備考67

活動予定費用の負担先備考68

活動予定費用の負担先備考69

活動予定費用の負担先備考70

活動予定費用の負担先備考71

活動予定費用の負担先備考72

活動予定費用の負担先備考73

活動予定費用の負担先備考74

活動予定費用の負担先備考75

活動予定費用の負担先備考76

活動予定費用の負担先備考77

活動予定費用の負担先備考78

活動予定費用の負担先備考79

活動予定費用の負担先備考80

活動予定費用の負担先備考81

活動予定費用の負担先備考82

活動予定費用の負担先備考83

活動予定費用の負担先備考84

活動予定費用の負担先備考85

活動予定費用の負担先備考86

活動予定費用の負担先備考87

活動予定費用の負担先備考88

活動予定費用の負担先備考89

活動予定費用の負担先備考90

活動予定費用の負担先備考91

活動予定費用の負担先備考92

活動予定費用の負担先備考93

活動予定費用の負担先備考94

活動予定費用の負担先備考95

活動予定費用の負担先備考96

活動予定費用の負担先備考97

活動予定費用の負担先備考98

活動予定費用の負担先備考99

活動予定費用の負担先備考100

4 小中高の連携

(1) 小中の連携

玖島中学校で行われる総合的な学習の時間では、地域に出向き、説明をしたり、活動をしたりする機会が多くある。その場を活用して、小学校と中学校が連携を図った。例えば、中学1年生が行う「まつりへの参画」では、中学生がまつりのスタッフとして、小学生は客として、交流を図った。また、中学2年生が行う「事業説明会」では、小学校の体育館を利用することで、小学生が中学生の総合的な学習の時間の活動を知ることができた。ここ2年間は、くしマルシェにも3小学校の6年生が参加しており、活気溢れる場を見て、「私も早く玖島中学校の生徒になりたい。」と思った児童もいた。中学3年生は、昨年度のくしマルシェでの売上金を利用し、鈴田小学校へ校旗を寄贈した。

このように連携を図ることで、小学生が中学校進学への不安を解消し、また憧れや希望をもつ機会となった。また、中学生においては、先輩として社会の一員としての責任感や自覚をもちながら活動する生徒が多く見られた。



(2) 中高の連携



玖島中学校で行われる起業体験学習において、商品開発で連携を図った。食品を扱うことは難しいため、地域の菓子店を経由して、向陽高校パティシエ科とつながることができた。菓子作りを専門で学んでいる先輩を見て、憧れの気持ちをもつ生徒もいた。

(3) 小高の連携

小学校と高校においては、5つの連携を図ることができた。

- ①エプロン作り 大村小学校5年生と大村高校家政科
- ②おにぎり作り 三浦小学校3年生と大村高校家政科
- ③みかんゼリー作り 三浦小学校5年生と大村城南高校
- ④くろもんまつりへの協力（スタッフとして） 大村小学校と大村高校ボランティア部
- ⑤くろもんまつりへの協力（竹馬の寄贈） 大村小学校と大村工業高校

以前から行われている連携もあったが、この2年間でふるさと学推進協議会の委員の皆様にもご協力いただいたことで、大村市内すべての高校と連携を図ることができた。特に小学生は、高校生に丁寧に教えてもらったことで、どの学習もスムーズに効率よくすすめることができた。異なる年齢層の児童生徒同士が交流する機会が増えることで、小学生、高校生どちらにおいてもコミュニケーション能力や協力する力が養われた。



5 成果

(1) アンケート結果

令和5年・6年度の2年間の児童生徒の変容を見取るため、事前（令和5年4月実施）と事後（令和7年1月実施）に全学校でアンケートを実施した。

各項目を4段階で（4：あてはまる 3：ややあてはまる 2：ややあてはまらない 1：あてはまらない）回答し、3・4の回答の割合は以下のとおりである。

①質問項目

「自分たちが住む地域や学校のために、今自分ができることを考え行動することができる。」

学校名	R5.4月の3・4の割合	R7.1月の3・4の割合	
三浦小学校	72.6%	83.0%	+10.4
鈴田小学校	66.8%	69.7%	+2.9
大村小学校	79.6%	86.9%	+7.3
玖島中学校	69.0%	87.1%	+18.1

②質問項目

「将来、大人になったとき、ふるさとのために役立つことをしたい。」

学校名	R5.4月の3・4の割合	R7.1月の3・4の割合	
三浦小学校	69.5%	79.4%	+9.9
鈴田小学校	64.7%	80.5%	+15.8
大村小学校	88.2%	88.7%	+0.5
玖島中学校	70.0%	83.5%	+13.5

(2) まとめ

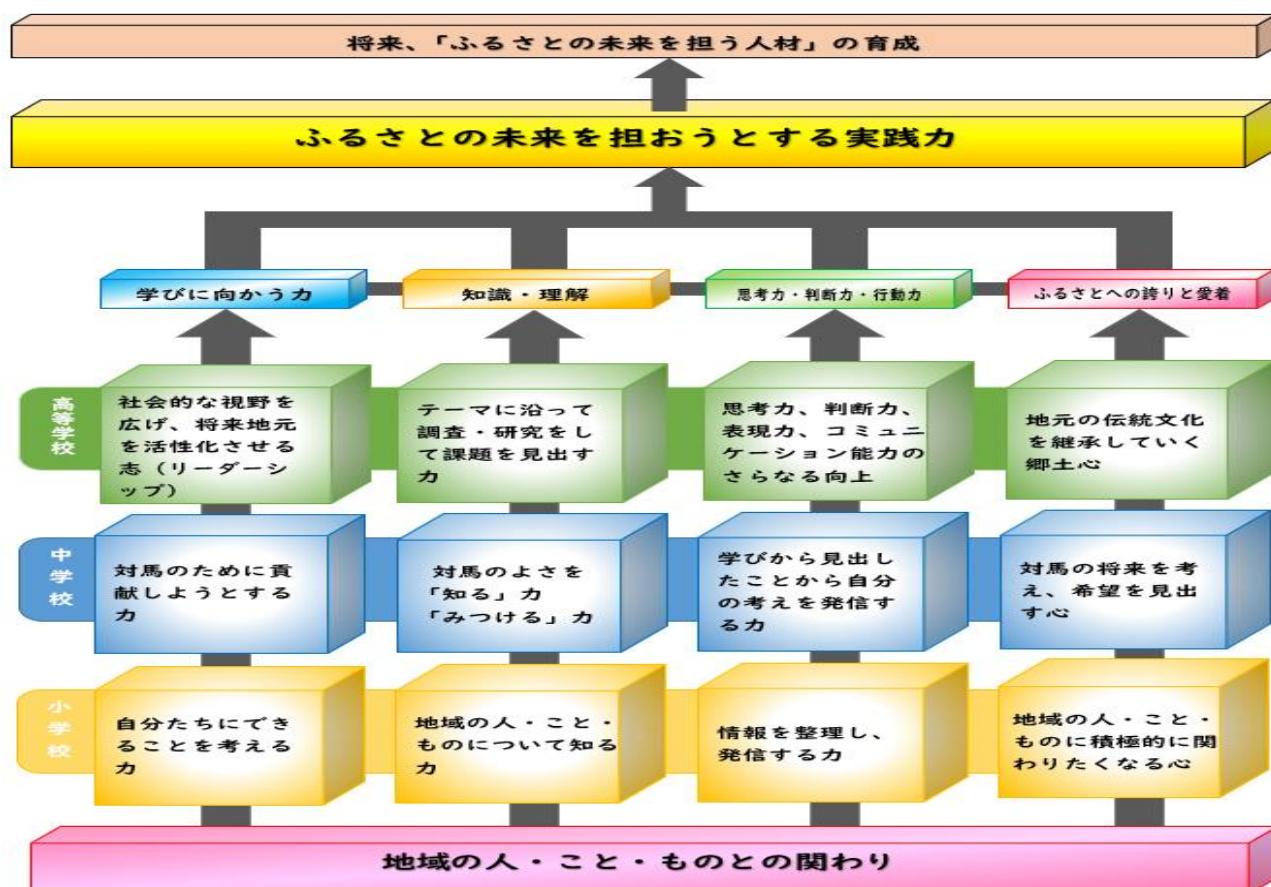
(1)の結果から、本研究活動がふるさと教育の目標である「ふるさとの未来を担う人材の育成」の達成にも十分に寄与したと考える。また、教職員のアンケートには、「これまで漠然と行っていた総合的な学習の時間や生活科の学習が、ふるさと教育という1本の軸によって、芯のある学習となった。中・高との連携など新たな取組ができ、子供たちが憧れをもつよいきっかけともなった。カリキュラムが整理されたことにより、系統性が明確になり、今後の見通しが立てやすくなった。」と書かれていた。また、高校側からは、「小学生との交流は高校生にとっても有効であった。無理をしないことが長続きをする上で大切で、今あるものを少し視点を変えることでふるさと教育が推進できると思う。」という回答もあった。

この2年間で、来年度以降のふるさと教育への素地が完成されたと考える。ふるさとと繋がりのある活動を精選したカリキュラムの完成、資料や人材との繋がりの整理など、玖島中学校区のふるさと教育が継続可能なものとして方向性を示すことができた。今後は更に、洗練された「玖島中学校区4校のふるさと教育」となっていくよう、つながりを意識し、様々な面で連携を図っていききたい。

比田勝小学校と比田勝中学校は、地域・学校の強みに着目して取組を進めた。比田勝地区は雄大な自然に抱かれた韓国が眺望できる国境の町であり、豊かな歴史・文化・人のつながりを有している。小・中・高・保護者・地域代表・対馬市教育委員会で構成するふるさと学推進協議会では、「国際交流」と「地域交流」による人とのつながりを強みと捉え、カリキュラムとして整理し、小・中・高による系統的なふるさと教育の充実を図った。子供たちの探究的な学びは、地域振興や環境保全等に取り組む「対馬活躍人」の思いや活動に触れることで、国際交流の視点を加え課題解決策を考察するなど、充実したものとなった。また、伝統行事「舟グロー」や「国境マラソン」、「海岸清掃」等への校種を超えた取組は世代が縦につながり、共にふるさとの未来を担おうという思いをより強固にした。そして、ふるさと学発表会では、大人たちはふるさとの未来への思いを語り、小中学生は思いを基に描いたふるさとの未来を提言し、高校生は描いたふるさとの未来を具現化する決意を表明した。このように、地域・学校の強みを生かしたふるさと教育の推進により、世代を超えてつながる体制がより確かなものとなり、子供たちがより良い地域社会の形成者としてふるさとの未来を担おうとする姿勢の育成につながった。

I 育成する資質・能力

「ふるさとの未来を担う人材」の育成を目指し、小・中・高のふるさと教育によって育成する資質・能力を、学びに向かう力、知識・理解、思考力・判断力・行動力、ふるさとへの誇りと愛着とした。



2 年間指導計画

(1) モデルカリキュラム

研究を始めるに当たり「交流」をテーマに協議し、比田勝地区で育まれてきた歴史・文化・人のつながりを地域の特色、強みと捉え「国際交流」と「地域交流」を柱に学習活動を整理した。

研究テーマ					
『ふるさとへの誇りと愛着を育むとともに、未来を担う児童生徒の育成』 ～ 地域の人・こと・ものとの関わりを通して ～					
比田勝小学校・比田勝中学校・上対馬高等学校					
校種	学年	国際交流		地域交流	
		歴史	国際交流	水産業	農業・林業(森づくり)
小学校	3		地域のよさを発見しよう(食) ・韓国食について		地域をよさを発見しよう(食) ・しいたけ、そば、かすまき ・そば打ち体験
	4	地域をよさを発見しよう(自然) ・日本と韓国とのつながりについて			地域をよさを発見しよう(自然) ・ツシマヤマメコ ・対州馬
	5		対馬をよりよい島にしよう ・韓国語教室について	対馬をよりよい島にしよう ・水産教室(イカさばき体験)	対馬をよりよい島にしよう ・米作り体験(田植え、稲刈り)
	6	対馬・自分未来プロジェクト ・朝鮮通信使について			対馬・自分未来プロジェクト ・対馬・自分未来プロジェクト構想
中学校	1		地域を「知る」学び ・韓国語講座 ・韓国人観光客向けアンケート作成	地域を「知る」学び ・水産業(釣り・魚さばき体験) ・魚の販売までの調査	
	2	地域に「かかわる」学び ・対馬と韓国に関わる歴史	地域に「かかわる」学び ・対馬の観光業について ・対馬と島外の観光地の比較		地域に「かかわる」学び ・上対馬PR活動
	3	地域に「貢献する」学び ・「わたしとふるさと」をテーマの柱にし、個人研究およびグループ研究を行い、対馬の未来についての課題や提言を発信する ・地域の人材や事業所と連携した研究			地域に「貢献する」学び ・舟グロー体験 ・職場体験学習
高等学校	1	・韓国文化体験(文化理解) ・ハンブル体験		・魚調理教室 ・水産業・海洋環境に関する探究活動	・舟グロー競漕 ・職場体験学習
	2	・韓国文化体験(料理教室)	・韓国人観光客向けマナーブックづくり ・観光客向けHP作成	・対馬の森の保全、獣害対策に関する探究活動 ・オウゴンオニユリの栽培	

※高等学校の第3学年については、総合的な探究の時間を進路学習にあてている

小 学 校 の 各 科 と の 関 連	総合的な学習の時間の目標		横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指す。				
	〈国語〉	〈社会〉	〈算数〉	〈理科〉	〈生活〉	〈音楽〉	〈音楽〉
中 学 校 の 各 科 と の 関 連	調べたことや、自分の考えを話したり聞いたりする活動を通して、自分の思いや考えをまともな表現を工夫することで、伝え合う力を高める。	地域の特色や、伝統文化、農林水産業についての課題を把握し、その解決方法を考える活動を通して、考えたことを説明したり、それをもとに議論したりする力を養う。	表やグラフの特徴を用い方を理解したり、読み取ったりする活動を通して、系統的な問題解決のよさに気づき、生活や学習に活用しようとする。	植物の育ち方について追究する活動を通して、予想や仮説を基に解決方法を見出し、他者と関わりながら問題を解決しようとする。	可探検に行き、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考え、自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かり、人やものを大切にしようとする。	郷土の音楽に興味関心をもち、生活と結びつけて歌い継がれてきた歌を歌ったり聴いたりして、その関わりについて考え、演奏のよさを見いだしながら曲全体を味わって聴こうとする。	郷土の音楽に興味関心をもち、生活と結びつけて歌い継がれてきた歌を歌ったり聴いたりして、その関わりについて考え、演奏のよさを見いだしながら曲全体を味わって聴こうとする。
	身近にある材料や場所のよさを生かして、表現したり、友達と協力しながら楽しく活動したりしようとする。	地域の人々とのよりよい関わりについて考え、課題解決に向けた一連の活動について、考えたことを分かりやすく表現しようとする。	伝承されてきた地域の誇りの誇り方の特徴をとらえて、基本的なステップや動きを身に付け、音楽に合わせてみんなで楽しく踊って交流することができる。	自分の住んでいる町を知ってもらうために、学んだ英語を使って、外国の人に自分たちの町を紹介しようとする。	地域の人々や生活、伝統、文化に親しみ、それらを大切にしようとする。を通して、郷土を愛することについて考え、地域に積極的に関わろうとする。	身近な人の生き方から自己実現を関するために必要なことを理解し、自己のよさを生かしながら将来への見通しをもって行動しようという思いをもつ。	身近な人の生き方から自己実現を関するために必要なことを理解し、自己のよさを生かしながら将来への見通しをもって行動しようという思いをもつ。
高 等 学 校 の 各 科 と の 関 連	総合的な学習の時間の目標		横断的・総合的な学習を仕組むことで、生徒自らが課題を設定し、体験活動や調査活動で得た情報や経験を生かして課題の解決や探究をすすめる、自己の特性や生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指す。				
	〈国語〉	〈社会〉	〈数学〉	〈理科〉	〈音楽〉	〈美術〉	〈美術〉
高 等 学 校 の 各 科 と の 関 連	情報の収集や整理の仕方について、学んだことを目的や場面に応じて的確に伝え合おうとする態度を育成する。 ・「水問題」や「環境汚染物質」に関する説明的文章の学習内容を活用し、ふるさとの環境問題に対する興味・関心を高める。	ふるさとの歴史や地理に関心をもち、地域行事に積極的に関わり、地域発展に必要な情報を集め、資料から読み取ったことをまとめて発信する力を養う。	ふるさとに関する資料について、その傾向などを適切に読み取り、それを筋道立てて説明する力を養う。	ふるさとの生物や環境に関心をもち、目的意識をもって観察、調査などを行い、科学的に調べられる能力や態度及び科学的な見方や考え方を養う。	音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育み、音楽に対する感性を豊かにし、音楽及び科学的な見方や考え方を養う。	音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育み、音楽に対する感性を豊かにし、音楽及び科学的な見方や考え方を養う。	伝える目的や条件などをもとに、伝える相手や内容、社会との関わりなどから主題を生み出し、伝達の効果と美しさなどの調和を総合的に考え、表現の構想を練る力を育成する。
	・スポーツを「見る・知る・支える」という視点を持ち、地域行事に積極的に関わる。 ・健康・体力の保持増進を図り、活力ある地域づくりに貢献する意識を高める。	地域の産業と生物育成の技術との関わりを学ぶ中で、安全性、環境への負荷、経済性などの多様な視点で現状を評価し、よりよい生活や持続可能な社会の構築を目指す力を育成する。	ふるさとの食料を生かすなどの調理を通して、ふるさとの食文化について理解を深め、食生活に関心をもち、課題をもって生活によりよくしようとする態度を育成する。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	学習活動全体を通して、道徳的心情、判断力、実践意欲態度などの道徳性を養う。	学習活動全体を通して、道徳的心情、判断力、実践意欲態度などの道徳性を養う。	自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活および人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

地域の人・こと・ものとの関わり					
〈地域の人〉		〈地域のこと〉		〈地域のもの〉	
・人材バンクの作成 ・PTAや学校評議員との連携		・地域コーディネーター ・市役所		・国境マラソン ・おっどん祭	
				・豊崎神社大祭 ・対馬沖海戦追悼慰霊祭	
				・上対馬総合センターの活用 ・しまっ子郷土読本の活用	

(2) 小・中・高・地域との関わり

身に付けさせたい心情や力									
ふるさと未来を担おうとする実践力									
校種	比田勝小学校			比田勝中学校			高等学校		地域交流
重点項目	○人・こと・ものについて知る力 ○課題を見出し、自分たちができることを考える力 ○情報を整理し、発信する力			○対馬のよさを知る・見つける力 ○対馬のために貢献しようとする力 ○発信する力			○社会的な視野を広げ将来地元を活性化させる志(リーダーシップ) ○課題を見つけ、解決に向けて仲間と協力して行動する力 ○地元の伝統文化を継承していく郷土心 ○思考力、判断力、表現力、コミュニケーションの能力		【目的】 ○学校と地域、異校種間の連携強化 ○地域行事への参画 ○地域の人、こと、ものの活用促進
4月	3年	特産物調べ・町探検		1年	全体オリエンテーション		1年	進路学習	小中職員交流(顔合わせ) ★打ち合わせ(年間計画確認)
	4年	対馬の自然・出前授業		2年	全体オリエンテーション		2年	進路学習	
	5年	田植え		3年	ふるさと学研究テーマ決め		3年	進路学習	
	6年	対馬活躍人講座・国境マラソン準備					全校	吹奏楽部ひとつばたご祭り演奏・地域清掃	
5月	3年	特産物調べ		1年	釣り体験		1年	進路学習	★第1回推進協議会
	4年	対馬の自然・出前授業		2年	対馬の観光業・韓国の歴史		2年	テーマ設定	
	5年	稚魚放流・出前授業・魚さばき体験		3年	ふるさと個人研究		3年	進路学習	
	6年	国境マラソン準備・自分未来P					全校		
6月	3年	店舗見学		1年	釣った魚について販売までの調査		1年	進路学習	※23日(日)国境マラソン
	4年	ヤマネコ見学・乗馬体験・出前授業		2年	対馬の観光業・韓国の歴史		2年	グループ探究	
	5年	宿泊学習		3年	ふるさと個人研究学年プレゼンテーション		3年	進路学習・対馬市お仕事説明会	
	6年	国境マラソン準備・自分未来P		全校	国境マラソンボランティア		全校	国境マラソンボランティア活動 地域清掃・吹奏楽部あじさい祭演奏	
7月	3年	そば収穫体験		1年	魚さばき体験(発表に向けてのまとめ)		1年	進路学習・島内インターンシップ	※14日(日)舟グロ大会
	4年	ヤマネコ見学・乗馬体験・出前授業		2年	対馬の観光業・韓国の歴史		2年	グループ探究	
	5年	出前授業		3年	舟グロ体験・職場体験学習		3年	進路学習	
	6年	対馬活躍人講座					全校	伝統文化体験学習(舟グロ)	
8月				1年			1年		★打ち合わせ(進捗確認)
				2年			2年	離島・半島インターンシップ	
				3年			3年		
9月	3年	しいたけ・そば収穫体験		1年	水産学習表現方法検討		1年	郷土学習	★第2回推進協議会
	4年	センター体験活動・まとめ		2年	対馬と島外の観光地の比較		2年	グループ探究	
	5年	稲刈り		3年	ふるさとグループ研究①		3年	進路学習	
	6年	修学旅行に向けて→修学旅行							
10月	3年	そば収穫体験		1年	発表会に向けて		1年	郷土学習	★打ち合わせ(発表会について)
	4年	これまでのまとめ		2年	対馬と島外の観光地の比較		2年	グループ探究	
	5年	農林水産業まとめ		3年	ふるさとグループ研究②		3年	進路学習	
	6年	自分未来P							
11月	3年	発表会に向けて	発表会	1年	発表会に向けて	発表会	1年	論理コミュニケーション	ふるさと学発表会
	4年	発表会に向けて		2年	発表会に向けて		2年	グループ探究中間発表	
	5年	発表会に向けて		3年	ふるさとグループ研究プレゼンテーション		3年	進路学習	
	6年	発表会に向けて・博物館見学							
12月	3年	そばうち体験		1年	韓国語講座		1年	郷土研究・対馬市島内企業説明会	
	4年	情報収集		2年			2年	グループ探究・修学旅行事前学習(韓国)	
	5年	韓国語講座		3年	進路学習		3年	進路学習	
	6年	朝鮮通信使・対馬韓国の歴史							
1月	3年	9年間の自分史まとめ		1年	韓国人観光客向けアンケート作成		1年	郷土研究・対馬の水産教室	★打ち合わせ(研究の総括) ★第3回推進協議会
	4年	学級内発表会に向けて		2年	進路学習(上級学校について)		2年	グループ探究最終発表	
	5年	ふるさと学習のまとめ		3年	進路学習		3年		
	6年	自分未来P							
2月	3年	自分史・将来の夢		1年	進路学習(職業について)		1年	郷土研究	★打ち合わせ(次年度カリキュラム)
	4年	学級内発表会		2年	進路学習(上級学校について)		2年	進路学習	
	5年	6年生に向けて		3年	進路学習		3年		
	6年	卒業に向けて							
3月	3年	韓国の食(料理)		1年	進路学習発表		1年	進路学習	
	4年	日本と韓国の文化調べ		2年	進路学習発表		2年	進路学習	
	5年	6年生に向けて		3年			3年		
	6年	卒業に向けて							

3 実践

(1) 地域の「人」との関わり

比田勝地区の強みである地域の「人」との関わりを起点にしてふるさと教育の展開・充実を図った。

① 対馬活躍人講座（小・中）

対馬を思い実践を続ける人々との出会いは子供たちの目を輝かせ、主体的な学びにつながった。

小 学 校	中 学 校
① 国境マラソン実行委員長 ② 地域おこしに取り組むダンス講師 ③ 地域創生に取り組む一般社団法人スタッフ ④ 地元漁師 ・対馬の未来や、自分の将来について考えるきっかけとなった。 	① 国境マラソン実行委員長 ② 元アナウンサー ・地域の方の生き方・考え方・ふるさとへの思いや若い世代への願いに触れることができた。 

② 韓国語講座（小・中・高）

韓国との交流の歴史や観光客との関わりから国際交流の視点やコミュニケーション力を育んだ。

小 学 校	中 学 校
講師 上対馬振興局（市職員） ・韓国の簡単な挨拶や単語や日本との違いについて教えていただき、国際交流について興味をもつよい機会になった。  	講師 対馬在住の韓国人国際交流員 韓国人ゲストティーチャー ・コミュニケーションの実践力を高めるため、韓国の言葉や文化を分かりやすく学んだ。 ・学習の後、韓国人観光客に道を尋ねられた生徒が実際に会話するなど、実生活で活用していた。 

③ 水産教室（小・中・高）

対馬の主たる産業の水産業について小学生から高校生まで発達段階に応じ系統的に学習した。

小 学 校	中 学 校
① 講師 上対馬漁協職員・地元漁師 ② 対馬水産業普及指導センター職員 内容 稚魚放流、イカ捌き体験 対馬の水産業についての講話 ・自分たちの暮らしと水産業との関わりについて考えた。  	① 講師 上対馬漁協職員・地元漁師 内容 釣り・魚さばき・調理の体験学習 講義 漁獲から販売までの流れ ・水産業の特長を生かし、観光業に生かす手立てなど、自分たちにできることを主体的に考える学習を行った。 

④ 合同学習（小・中）

合同学習では、地域人材の思いを知ることで、より主体的な学びに取り組む姿が見られた。

小中合同・殿崎海岸清掃活動	
中学3年生が小学5年生との清掃活動への事前学習として（一社）対馬CAPPAによる講義を受け、海岸の視察を行った。その後、対馬CAPPAや青年漁協組合とともに、小中合同で殿崎海岸の清掃活動を行った。世代を超えた活動を通じ“自分たちの海は自分たちで守りたい”という意識が高まり、学習に対しての主体性が育まれた。海外からのゴミも多く、子供の力では解決できない問題については、ふるさと学発表会で地域の大人たちに向けた問題提起につながった。	

（2）地域の「こと」との関わり

対馬で受け継がれてきた豊かな歴史と文化は、伝統行事を通じ多くの人々をつないできた。国境マラソンは海外からの参加も多く、子供たちは比田勝の魅力をPRする関わり方を考え、実践した。

① 国境マラソン in TSUSHIMA（小・中）

小 学 校	中 学 校
活躍人講座で大会実行委員長の思いを知り、自分たちにできることを考えた。のぼりやステッカー、うちわ、旗を作成し当日は応援グッズを使って家族や地域の方々と応援をした。また、SNSで活動の様子を発信した。 	地域ボランティアの一員として、主に給水所でランナーのサポートをした。国外からのランナーも多く、韓国語や英語で異文化交流ができ、国際理解を深める良い学びの場となった。 

② 舟グロー体験（中・高）

上対馬の伝統『舟グロー』体験 in 上対馬町大河内湾	
舟グロー保存会と上対馬高校の生徒たちが、中学3年生に舟の漕ぎ方などをレクチャーした。交流を深めながら地域の伝統行事を体験した。	

（3）地域の「もの」との関わり

上対馬総合センターの活用	「つしまっ子」郷土読本の活用	ふるさと教育関連作品
ふるさと学発表会や推進協議会、小中合同会議を実施した。地域の中心部にあり関係校から近く行事や作品展も行いやすい。 	小学校では月2回、対馬からたや方言や郷土読本に関するクイズなどで楽しく学ぶ「ふるさとタイム」を実施した。 	地域で得られるシーグラスや自然物を用いたものづくり、ふるさとをテーマした作品制作などを行った。 

(4)「ふるさと学発表会」

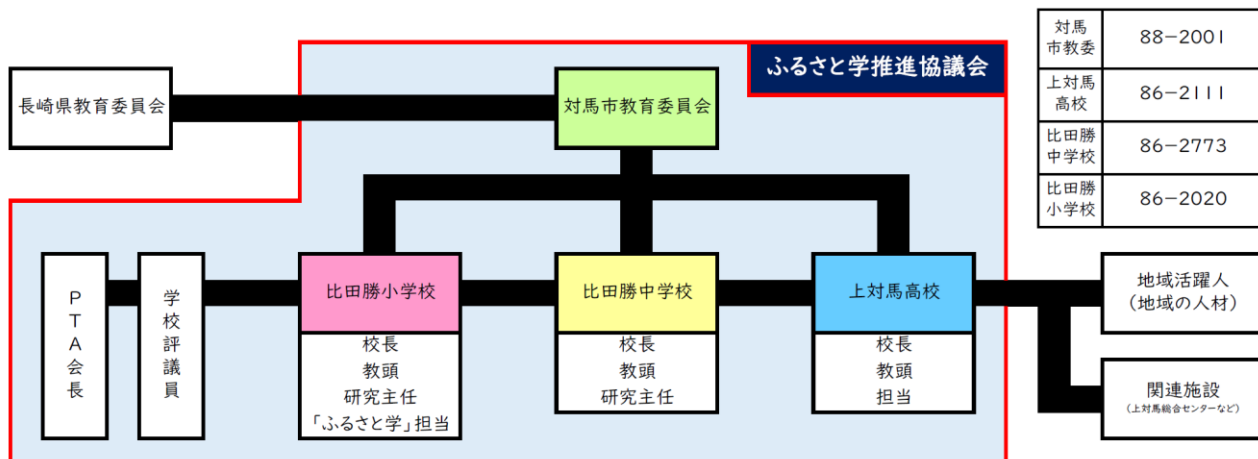
多数の作品展示や多様な発表を通し、地域と学校がふるさとへの思いを一つにする場となった。

① 小中合同の実行委員会の立ち上げ	② 各学年の発表
子供たちから有志を募り、小中合同のふるさと学発表会実行委員会を立ち上げた。主な活動として、発表会のスローガン作成や運営、ステージ発表、地域の方々へのインタビューなどを行った。諸活動で意欲的に小中学生をまとめ、発表会では、ふるさと対馬への思いを伝えた。 参観者からは「子供たちの言葉に勇気付けられた」などという温かい声が多く聞かれた。主体的に考えて行動する力や表現力の向上につながる活動となった。    	総合的な学習の時間で、ふるさと「対馬」について学んだことを様々な形式で発表した。 小5：農林水産業に関する魅力と課題 小6：合併により廃校となった旧豊小学校校舎の利活用について 中1：水産業の未来について 中2：対馬の魅力と観光業について 中3：美しい海を守るための提案 高校生：移住者増加に向けた取組について  
③ 実行委員会の発表	④ シンポジウム
実行委員が対馬市のケーブルテレビ局とともに対馬PR動画を作成した。地域の方々へのインタビューや対馬の未来への小中学生の思いを撮影し編集している。地域の方々と子供たちがふるさとに対する思いを共有したことで、ふるさと対馬への愛情がさらに深められた。地域の方からも好評だった。     	地域と児童生徒の代表、研究主任が登壇して「みんなで対馬の未来について考えよう」をテーマにシンポジウムを実施した。登壇者への質疑応答や発言に対して、2色の画用紙を使って参観者も意思表示する双方向型の形式とした。会場が一体となって意見を交わし、それぞれの立場からふるさとへの思いを深めた。   

4 小中高の連携

教職員交流（小・中）	ふるさと学推進協議会（小・中・高・地域）
今年度は、年に3回（4月、7月、10月）、小・中合同職員会議を実施した。 第1回は、職員の顔合わせを行い、それぞれの年間計画を共有した。そして、小中合同でできる活動がないか検討・協議し、様々なアイデアを出し合った。  第2回は、本発表の日程、セレモニーやシンポジウム、実行委員の活動について具体的に協議した。また、小5と中3の合同学習（海岸清掃活動）について話し合いを進めた。 第3回は、ふるさと学発表会当日の日程や役割を確認し、打ち合わせを行った。  その他、管理職の支援のもと研究主任どうしで定期的に打ち合わせを行い情報を共有し、必要に応じて、校内推進協議会を実施した。	年に3回（5月、9月、1月）開催し、関係校と地域の関係者・教育委員会とで情報共有と協議を行った。 小中合同会議で検討したふるさと教育のねらいや年間計画を共有し、それに関わる人材やもの、ことの情報を提供していただくことで、ゲストティーチャーの人選や、学習内容の精選につなげることができた。また、双方のニーズや実態を共有することで、本研究の目的にあった連携の在り方を見出すことができた。 2年目はより計画的に開催できたので、具体的なアイデア出しや、円滑な連携を図ることができた。また、ふるさと学発表会後の協議会では、次年度の方向性についても話し合った。地域にとっての学校の役割を考えながら、学校と地域で子供たちを育てていく持続可能な体制づくりを今後も検討していく。 

〔推進会議組織〕



5 成果

(1) アンケートから

① 児童生徒のアンケート結果と考察

○小中学校ともに、全12問の問いに対して「④当てはまる」「③やや当てはまる」「②やや当てはまらない」「①当てはまらない」の4段階から選択形式でアンケートを実施した（4月と11月）。

○なお、取組の改善につなげるため、小学校は別途感想や振り返りを追加し、中学校は上記と同様の形式2問および自由記述形式2問の計4問を追加して実施した。

小 学 校	中 学 校
■顕著な変化が見られたもの 〈設問2：自分たちが伝えたいことを整理して、正確に相手に伝えることができる〉 「当てはまる」と回答した割合 4月 85% → 11月 94% ・地域の方の講話や調べ学習を通して、学んだことを整理し、ふるさと学発表会の発表を通して、相手意識をもって伝え方を工夫する大切さに気付き、多様な立場の相手に対して発信することへの自信がついてきた。 〈設問11：自分たちが住む地域や学校のために、今、自分ができることを考え、行動することができる〉 「当てはまる」と回答した割合 4月 88% → 11月 100% ・自分たちが住む地域の現状を学び、課題の解決方法について考える学習を通して、持続可能な社会の担い手として、ふるさとのために何かしたいという意欲が高まった。 〈設問12 将来、大人になったとき、ふるさとのために役立つことをしたい〉 「当てはまる」と回答した割合 4月 94% → 11月 100% ・すべての児童が役立つことをしたいと感じており、ふるさと学習を通して学んだことを将来生かしていきたい、ふるさとの未来を担いたい、という思いが高まった。	■顕著な変化が見られたもの 〈設問9：自分たちが住む地域が好きである〉 「当てはまる」と回答した割合 4月 63% → 11月 85% ・4月に②と回答した生徒が1名のみで、①と回答した生徒はおらず、元々郷土愛が強い集団であるといえる。 ・11月は④③の回答のみで、特に3年生が④と回答した割合は92%にのぼった。 ・学習を通してふるさとの魅力を多く知ったことや、対馬を愛する地域の方々と交流できたことが要因の一つだと考えられる。 ■全学年で共通して高い水準であったもの 〈追加設問1：ふるさと学習をして良かったと思うか〉 「当てはまる」と回答した割合：100% ・主な理由として以下の3点があった。 I：『ふるさとへの理解・愛情』の向上 →「対馬のよさや課題を深く考えることができた」など II『情報活用能力』の向上 →「わかりやすく伝える方法や考え方が身に付いた」など III『課題解決能力』の向上 →「ふるさとのためになることを考えて行動できた」など ・学習の過程の中で、自己の変化を実感した声が多く聞かれた。系統的なふるさと教育により主体的な学びが繋がった成果といえる。

② 児童生徒のアンケート自由記述の回答

小 学 校	中 学 校
・スライドを作るのが難しかったけれど、対馬のことについて考えたので、よい発表ができたと思う。 ・林業のことについてわかりやすく伝えるための台本を作ったり、スライドを作ったりして、本番はうまく行ってよかったと思った。 ・対馬の未来や今の課題について会場の人たちと考えることができてよかった。 ・どうしたら観客を引き付けられるのだろうと考えながらスライドを作りました。 ・発表を見て、「対馬のことをもっと知りたい」「対馬の課題を解決したい」という思いが伝わった。	・対馬は思っていたよりいい島。自分のふるさを見つめ直して大切にしていこうと思った。 ・ふるさと学を通して、様々な視点からふるさとを考えることができた。対馬の魅力などを知れて、大人になっても対馬のためや地域のために働く職業に就いてみたいと思うようになりました。 ・他学年の発表も勉強になった。詳しく知らなかったことも知ることができた。 ・ふるさとの課題をそのままにするのではなく、自分たちから変えていかなきゃいけないという意欲がわいた。

③ 教職員と地域のアンケート自由記述の回答

教 職 員	地 域
・児童の問題解決能力や情報活用能力が高まったことが成果だと思う。 ・子供たちが地域のことについて興味をもち、学習への意欲が高まった。 ・身近な地域のことで知らないことが多くあることに気付き、地域についての誇りやよさについて気付くきっかけとなった。 ・子供も大人もふるさと対馬について真剣に考える良い機会になった。 ・中学生の展示物の鑑賞はすごくよい刺激になったようだった。 ・「当たり前」だったふるさとを改めて認識し、地元のために数多くの対馬人が活躍していること、その思いにふれることができ、子供たちのふるさとへの思いがさらに強まったと思う。 ・これまでの学びが、将来子供たちが行動をおこすきっかけとして残っていくことを期待したい。	・持続可能な学習や取組を検討して、今後もぜひ続けてもらいたい。 ・子供たちのふるさと愛が一層強まったと思う。ふるさとのために頑張る大人たちに出会えたことも良いことだと思う。 ・大人も一緒にふるさとの魅力について考え、新たな発見が得られた。子供が自分の考えや思いを発信することで、地域で協力したいという思いや関わりが増えると思う。 ・どの発表にも対馬への愛が溢れていました。 ・シンポジウムで、自分の経験を語る小中学生がとても印象に残った。 ・課題設定、調査研究、提言などがしっかりまとめられていた。発表手法も工夫されていた。 ・各学年が真剣に取り組み、対馬を活性化させたいという気持ちがとても伝わった。この先も、対馬および自分のふるさとを大事にして貢献してくれる子供が出てきてほしい。

(2) 次年度に向けて

① カリキュラム・マネジメントについて

今年度のふるさと学発表会では、それぞれの学年で考えた課題解決のアイデアを保護者や地域の方々に提案するという発表も行った。

この2年間で多くの地域の方々に関わっていただき、より充実した学習を行うことができた。次年度からも継続していくためには、地域の方々との関わりをもち続けるだけでなく、様々な企業や、行政とも関わっていく必要がある。関係機関と連携を図りながら、持続可能なカリキュラムを構築していきたい。単元のテーマについては、担任に選択肢の幅を持たせることで、その学年や指導者にあった学習を展開し、持続可能な取組が期待できる。

また、アンケートの結果から、情報の整理・分析に関する内容には、まだ改善の余地があることがわかった。ふるさと学習の中で、身に付けたい資質・能力を明確にして、さらに探究的な学習に取り組んでいきたい。また、対馬市にはたくさんの歴史的事象があり、対馬に貢献してきた人物がいる。対馬の歴史に関する学習も取り入れることで、さらにふるさとへの理解を深め、愛着を育むことにつながると考える。

② 人・こと・もののつながりについて

本年度の発表会でのシンポジウムでは、「あなたは対馬が好きですか？」という問いに対して、会場の児童生徒全員が肯定的な反応を見せた。事前・事後アンケートの結果にも表れているが、比田勝校区は、元来郷土愛が強い子供たちが多いと感じている。その郷土愛こそが、この比田勝小・中学校と地域の「強み」であると考えている。

そこで、本研究を進めるにあたり、ふるさとを愛する地域の人たちの姿や思いに実際にふれることで、さらにふるさとへの愛着や誇りを高めることを目指した。そのため、「地域の人・こと・ものを知る」こと、「地域との関わりを深める」ことが本研究の根幹になると考えた。

今後は、発表会を学習のゴールにするのではなく、「対馬市作成のアクションプランへの提言」などで子供たちのアイデアの具現化も視野に入れたカリキュラムにしたい。併せて、学校と対馬市とが連携することで、「持続可能なふるさと学習」になるよう改善していきたい。

今後も小中高の相互理解を深め、つながりをもってふるさと教育を推進することが、ふるさとの未来を担う児童生徒の育成につながると信じている。

ふるさと教育の成果が、いつ現れるのかわからないが、対馬で学んだ子供たちが「ふるさと対馬」で活躍する人材・遠く離れた力も対馬の発展を願う人材になってくれることを願う。



コミュニティ・スクールを活用したふるさと教育

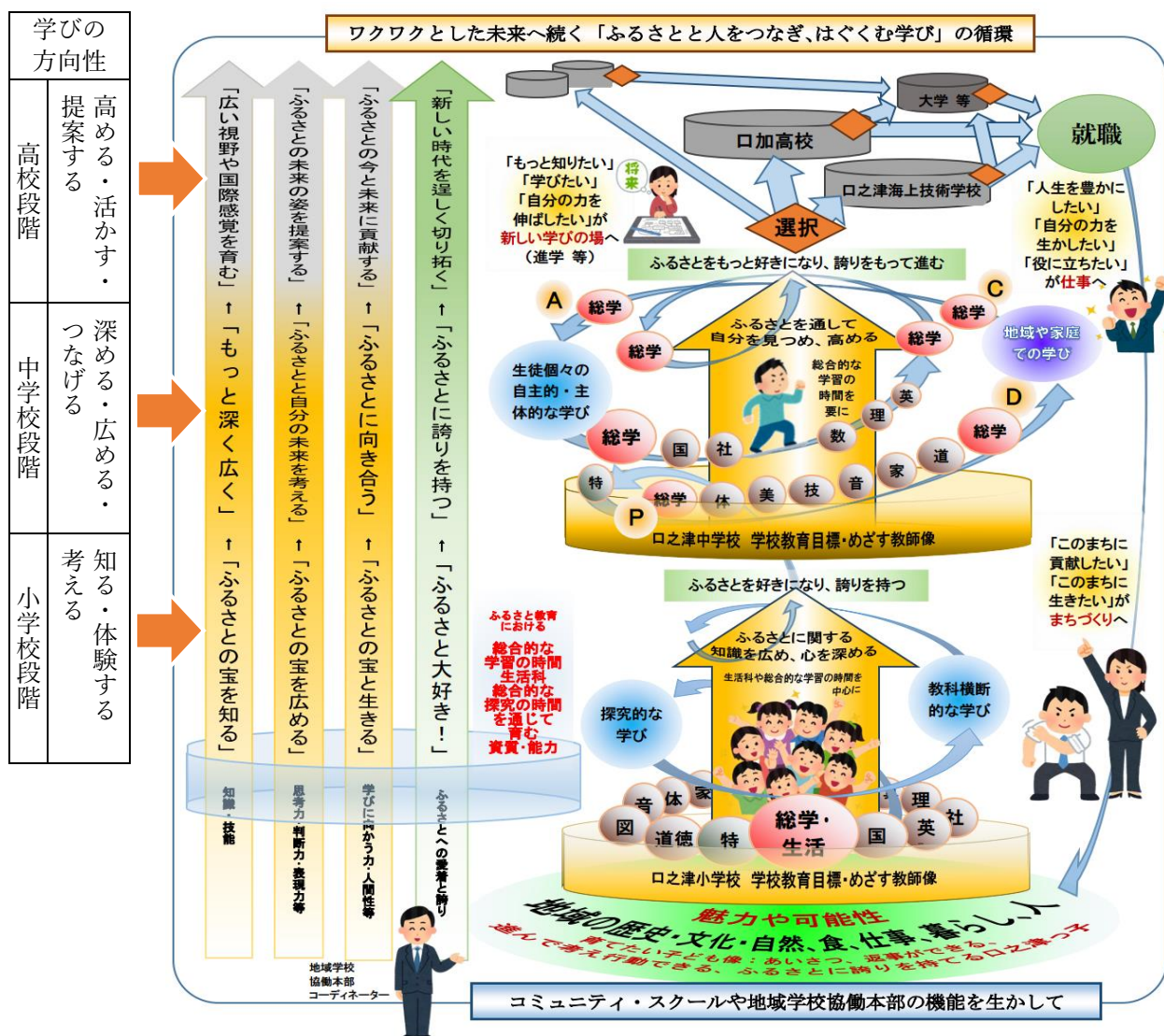
南島原市立口之津小学校 南島原市立口之津中学校

研究協力校：長崎県立口加高等学校

口之津小学校と口之津中学校では、令和５年度からコミュニティ・スクールを導入しており、合同で設置している学校運営協議会には、地元口加高校の校長が委員として加わっている。そこで、小中高が連携したふるさと教育を行うにあたり、既存の学校運営協議会をふるさと学推進協議会も兼ねる組織として活用し、取組を推進した。ふるさと学推進協議会では、「口之津が一丸となって育てたい口之津っ子の姿」について熟議し、その実現に向けて、ふるさと教育を切り口とした実践を行った。コミュニティ・スクールを活用することのよさは、各校種の校長や地域の代表が一堂に会す学校運営協議会だからこそ、スムーズな連携・協働につながることや、地元のことを一番知る地域の方の知識や人とのつながりを最大限活かせることにある。これにより、口之津だからこそできるふるさと教育を実現することができた。また、地域学校協働本部と連携を図ることで、より幅広い地域人材との連携が可能となり、地域全体の活性化にもつながった。

Ⅰ 育成する資質・能力と全体構想

「口之津を学び、好きになり、誇りをもつ子どもの育成」を研究主題とし、発達の段階や校種の特性を考慮して「学びの方向性」を定め、ふるさと（口之津）が持つ特性（歴史、文化、自然、産業など）や保護者・地域の願い等を踏まえて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」に加え「ふるさとへの愛着と誇り」を育成する資質・能力と設定した。



2 年間指導計画～『くちのつモデル』カリキュラム系統表～

校種間で互いのカリキュラムを共有し合うことから始め、系統的な学びになるよう議論を重ねること
で、『くちのつモデル』カリキュラム系統表を作成し、各学年の年間指導計画に反映させた。

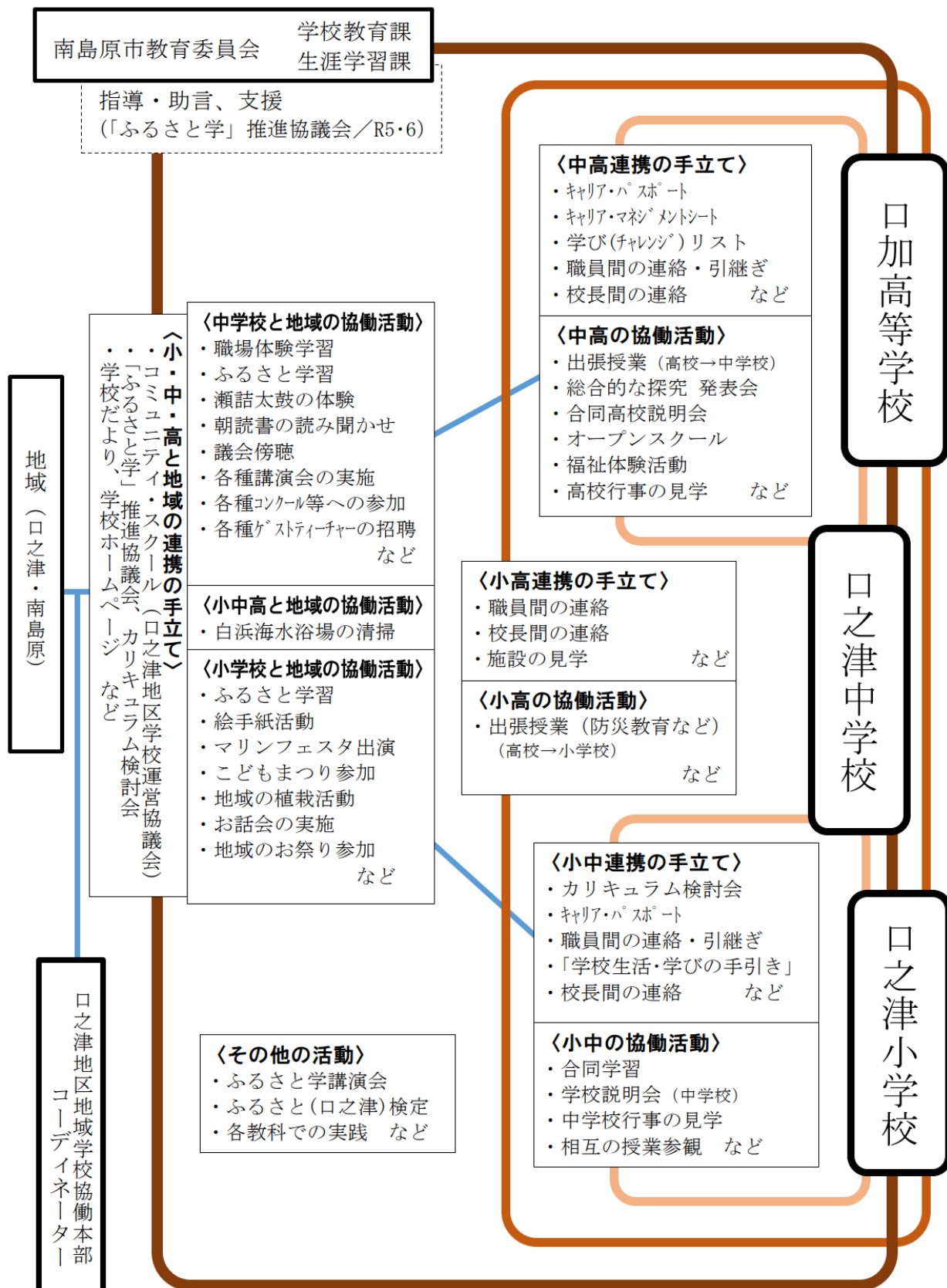
学習内容 段階	学びの発信	地域調査	環 境	福 祉	キャリア	防 災
高等学校 総合的な 探究の時間 グローバル 研究 ふるさと学習シ ートによる学び の連続性	探究 学習 発表会	ふるさと 教育 (1年)	地域 フィー ルド ワーク	福祉 体験 教室	進路ガイ ダンス (3年) ロカロ クエスト (1・2年) ロ加 未来 セミナー	防災 教育
中学校 総合的な 学習の時間 ふるさと学習シ ートによる学び の連続性	プロジェ クトK 個人テ ーマ研究 発表	郷土 学習 (1年)	講演会 (潮流 発電) (全) 廃油石 鹸づ くり (2年)	福祉体 験活動 (3年)	職場体 験学 習 (2年)	地域の 防災と 安全 (全)
小学校 総合的な 学習の時間	ふるさと発信 プロジェクト (6年)	発見！ 口之津 ヒストリー (6年)	白浜 海岸 清掃 (4 ～ 6年)		未来をつな ぐふるさと レンジャー (5年)	口之津の 防災を 知ろう (全)
小学校 生活科		わたした ちの町！ 口之津 (3年) たんけん しようよ 口之津の 町(2年) あそびにい こう よしらはま かいがん (1年)	守ろう！ 口之津の 宝(4年) 廃油石 鹸づ くり (2年) あそびにい こうよ しらはま かいがん (1・2年)	みんなが しあわせに！ (3年)	会いに行こう よ口之津の 町の人(2年)	

〈「くちのつモデル」カリキュラムを編成する上で留意したこと〉

- ①育てたい資質・能力を系統的に育成する。
- ②総合的な学習の時間だけでなく、各教科・領域の横断的な学びに資するものとする。
- ③コミュニティ・スクールの特性を生かした、地域との連携を推進する。
- ④口之津だからこそできる、口之津で取り組むからこそいいものにする。

3 実践

(1) 全体図



(2) 『くちのつモデル』カリキュラムによる校種をつなぐ学習

『くちのつモデル』カリキュラムによる、異校種の児童生徒・高校生の交流、地域とのつながりのある協働活動の中で、互いに寄せる憧れや愛おしさを抱き、地域の資源だけでなく人の素晴らしさを実感した。このような人とのつながりやその思いを循環させることが、ふるさとを活性化し、未来へと推し進めるエネルギーにつながると確信した。

①学びの発信（小・中・高・地域）

小学校では、地域の方々の協力を得てふるさとの特色を紹介するコマーシャル動画を作成した。中学校では「プロジェクトK」と題して、「ふるさとをよくするためにできること」について、年間を通じて個人研究を行い発表した。これらの小中学校の取組が、高校での探究学習、そして地域への貢献活動につながると考えている。

②地域調査（小・中・高・地域）

小1から高校まで、発達の段階に応じてめあてを設定し、ふるさとの自然や歴史、文化、産業などを知る活動を行った。これらは地図にまとめて掲示したり文化学習発表会などで発表したりした。

また、口之津出身のゲストティーチャーにふるさとを題材にした検定試験を作成してもらい、基本的な知識を獲得できる仕組みを作った。

③環境学習Ⅰ（小・中・地域）

小2と中2の総合的な学習の時間のカリキュラムを接続し、環境教育の一環として「廃油石鹸づくり」を行った。この作業を通して環境問題を考え、自然にやさしい暮らし方について考えた。

また、中学校では、潮流発電に関する講演を聴き、クリーンなエネルギーの確保やふるさとの海（有明海）の環境づくりについて学んだ。

④環境学習Ⅱ（小・中・高・地域）

小中高および地域の方々、そして行政とが一体となって、ふるさとを代表する白浜海岸の清掃に取り組んだ。小学生からシニアの世代までつながった取組を通じて、環境保全だけでなく、観光や憩いの場として海岸を守る意識を持つことができた。そして何よりも美しい白浜海岸の風景ときれいにした充実感を心に刻むことができた。



【南島原市博士 検定】（問題）		「私たちの南島原市」
No	問	答
1	福岡県佐賀県を除き、九州の自然や文化を味わえる観光地。その名前は？	南島原市
2	平成15年に発生した南島原市に属する自治体の総称は？	南島原市
3	南島原市は、南島原市に属する自治体の総称は？	南島原市
4	南島原市は、南島原市に属する自治体の総称は？	南島原市
5	南島原市は、南島原市に属する自治体の総称は？	南島原市
6	南島原市は、南島原市に属する自治体の総称は？	南島原市
7	南島原市は、南島原市に属する自治体の総称は？	南島原市
8	南島原市は、南島原市に属する自治体の総称は？	南島原市
9	南島原市は、南島原市に属する自治体の総称は？	南島原市
10	南島原市は、南島原市に属する自治体の総称は？	南島原市

⑤福祉学習（小・高、中・高）

研究協力校である口加高校に国家資格を取得できる福祉科があるという利点を最大限に生かし、小3や中3では、高校生を講師として招聘し、福祉学習を行った。高校生の説明により、「福祉」の現状や大切なこと、今後の福祉の在り方を学んだほか、車椅子や白杖の使用方法を学び、妊娠時や身体的に不自由な状況を体験して、福祉学習を深めることができた。

なお、これらの学びは、小学校では講師となった高校生に発表（フィードバック）したり、中学校では自身の個人研究に生かしたりした。



⑥キャリア教育（小・中・高・地域）

小中高のつながりのあるキャリア教育として、小学校段階では、まずは町内で「はたらく人」に会いに行き、実際に仕事の様子を見学したり、話を聴いたりした。中学校段階では、自身の進路構想（キャリア形成の方向性）に応じて事業所を選び、職場体験活動を行った。これらを高校段階でのよりよい進路選択につなげたいと考えた。

このキャリア教育での学びに、他の学習項目（福祉や環境、防災、地域調査など）で得た知見や実感がよい方向で影響し、よりよい進路選択ができればと願っている。



⑦防災教育（小・高、中・高）

自然災害や犯罪等に対処する危機管理等などに関する防災教育は、避難訓練を行う機会に併せて学習を進めてきた。そこで本研究では、学びを一步進めるために、探究学習で学びを深めた高校生を講師に迎え、過去の災害の様子について説明を受けるとともに、地域の特色を踏まえた防災及び減災の在り方について学んだ。このことにより、より身近に災害発生の危機を感じ取り、危機管理の意識を高めることができた。

また、発表する高校生の姿を見て、発表の仕方や話し方なども学ぶことができた。



(3)「ふるさと学」発表会

令和6年10月25日(金)、南島原市立口之津小学校を会場にしてふるさと学発表会を行った。その概要は、以下のとおりである。

小中高の児童生徒が様々なブースに分かれ、学級単位での発表に加え、異校種の児童生徒が協働的に発表する（ふるさと学ライブ）など、多様な発表形態をとった。



参加者による協議会（ふるさと学トーク）では、ファシリテーター（小中の教員）が、これまでの研究内容をもとに、ふるさと教育に関するテーマに基づく協議を進めた。



多くの学習成果物を会場内に掲示し、学習成果を多角的に披露した。



参加者から寄せられたアンケートでは、「小中高、地域との連携・協働がなされ、まさにつながりが感じられる発表会でした。」「子供たちが笑顔で話す姿を見て、ふるさとの宝に対する思いが深まりつつあるのだと感じました。」「地域との連携が、子供とふるさとを育てることを改めて感じました。」というものが多くあり、小中高が一体となる取組やふるさと教育の推進、併せて地域活性化に寄与できたものとする。

V コミュニティ・スクールを活用したふるさと教育

①コミュニティ・スクール及び地域学校協働本部と「ふるさと学」実践の関連図

口之津地区 学校運営協議会・地域学校協働本部

コミュニティ・スクール（口之津小・口之津中）

口之津地区で育てたい子ども像
 1 あいさつ・返事ができる口之津っ子
 2 進んで考え、行動する口之津っ子
 3 ふるさとに誇りが持てる口之津っ子

南島原市教育委員会 学校教育課 生涯学習課

任命 意見

口之津地区 学校運営協議会

栗田幸隆会長 以下22名の委員

役割 学校運営や運営に必要な支援に関する協議を行う
 ①校長が作成する学校運営の基本方針を承認する
 ②学校運営について、教育委員会または校長に意見する
 ③教職員の任用に関して、教育委員会に意見する

説明 承認・意見

①学校運営の基本方針
 ②学校運営・教育活動
 ③その他必要な事項

追加協議事項（R6年度）
 口之津地区で育てたい子ども像
 「くちのつモデル」カリキュラム

小中高連携

長崎県立口之津高等学校
 ・カリキュラム作成
 ・授業連携
 ・地域貢献

口之津を学び、好きになり、誇りをもつ子どもの育成
ふるさと学の実践

まち活性化 支援

地域学校協働本部事務局
 地域と学校をつなぐコーディネーター

連絡調整

くちのつ、だいすき！

口之津地区 地域学校協働本部 賛同団体 33団体

役割 地域と学校が連携・協働して学校内外の活動を行う
 ①口之津を活性化させる活動 ②口之津小・中学校における教育活動支援
 ③独自の体験活動等

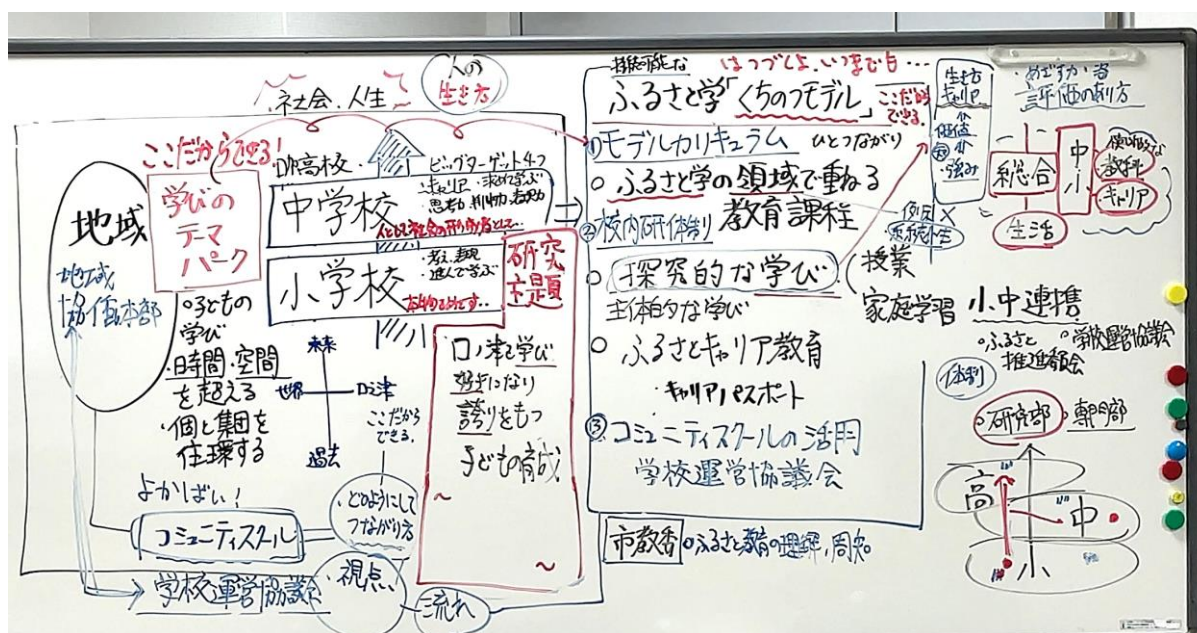
社会教育委員	青少年協	子ども会	民生児童委員	小学校PTA	中学校友会	自治会長会	みなとオアシス	口之津高等学校	海上技術学校
学校運営協議会	保護司会	少年補導員	食生活改善推進員	婦人会	文化協会	スポーツ推進員	南島原警察署	南島原消防署	口之津保育園
たまひびこども園	商工会口之津地区	社会福祉協議会	JJA島原豊仙	口之津郵便局	口之津史談会	図書館友会の会	口之津船員会		

令和5年11月には、ふるさと学推進協議会拡大会議として、小学校、中学校の教職員、学校運営協議会及び地域学校共同本部が参加し、「ふるさと学」カリキュラムについて意見交流を行った。カリキュラムを囲み、教職員と地域が向き合うことで、学校と地域がともに取り組んでいこうという気運が高まった。



この協議会のほか、各校や行政の担当者による協議や校長同士、教頭同士、研究主任同士による打合わせ等を行ってきた。このことにより、研究の方針の明確性や充実度が高まったと感じている。

なお、下の写真は、本研究を立ち上げる段階で協議した「研究の方向性」である。本研究が一過性で終わることのないよう「ふるさと学はつづくよ、いつまでも」との記述も見られる。



(2) 小中職員による系統性を考えたカリキュラム開発

小中高が一体となったふるさと教育を進めるためには、他校種の関連するカリキュラムの理解は避けて通れない。そこで本研究では、小学校と中学校の職員が、総合的な学習の時間および生活科のカリキュラムを模造紙大に拡大して持ち寄った。そして、ふるさと学に関連する学習内容を模索し、その系統的なつながりについて協議した。その結果、「学びの発信」「地域調査」「環境」「福祉」「キャリア」「防災」の6つを学習の柱に立て、系統的に学びを積み重ね、校種間の協働的な取組につなげることができた。

本研究による系統性のあるカリキュラムは、「小中高の連携」のほか、コミュニティ・スクールや地域・学校協働本部の活用、キャリア教育との関連、学びの時間や空間、個と集団の往還などについて熟議する中で練り上げてきた、明確な方針のもとに創り上げてきたものである。



5 成果

(1) アンケートの結果から

本研究を進める中で、以下のアンケートを実施した。

- ・対象…小中学校全児童生徒
- ・方法…項目ごとに「当てはまる」「やや当てはまる」「やや当てはまらない」「当てはまらない」の4段階から1つを選ばせ、「当てはまる」と「やや当てはまる」の割合を計上した。

「当てはまる」「やや当てはまる」の割合(%)

項 目			〇之津小学校			〇之津中学校		
			R5 6月	変 化	R6 9月	R5 6月	変 化	R6 10月
関心・意欲・態度	1	相手の気持ちを考え大切にして、意見を聞くことができる。	85	↗	96	96	↘	89
	2	自分が伝えたいことを整理して、正確に相手に伝えることができる。	73	↗	81	78	↗	84
	3	自分が「できること」や「すべきこと」を考え、自分から進んで行動することができる。	77	↗	85	70	↗	83
	4	自分が「苦手なこと」や「したくないこと」でも、全体のために行動することができる。	74	→	77	68	→	71
計画・探究・実践	5	計画を立て、物事に取り組むことができる。	79	↗	88	63	↗	79
	6	計画がうまくいかないとき、その原因を考え、解決のために行動することができる。	74	→	77	73	→	71
	7	必要な情報を、様々な手段を用いて集め、整理したり比較したりすることができる。	74	↗	89	78	→	77
	8	自分が得た情報をわかりやすくまとめて、伝えたり発表したりすることができる。	76	→	78	75	→	77
ふるさとの思い	9	自分たちが住む地域が好きである。	89	→	90	89	→	90
	10	自分たちが住む地域の良さを紹介できる。	56	↗	80	72	↗	77
	11	自分たちが住む地域や学校のために、今自分ができることを考え行動することができる。	77	↗	90	68	↗	74
	12	将来、大人になったとき、ふるさとのために役立つことをしたい。	72	↗	83	68	↗	73

「↗」…5%以上の上方変化があったもの

本研究を通じて児童生徒の意識に関し、効果があったと思われるものは以下のとおりである。

- ・自分が「できること」や「すべきこと」を考え、自分から進んで行動することができる。
- ・計画を立て、物事に取り組むことができる。
- ・自分たちが住む地域や学校のために、今自分ができることを考え行動することができる。
- ・将来、大人になったとき、ふるさとのために役立つことをしたい。

上記の表のとおり、小学校・中学校ともに、多くの項目で改善が見られ、特に数値を赤で示した項目では、10%以上の伸びがあった。

(2) 考察

①「ふるさと学」の在り方について

本研究における「ふるさと教育」は、まずは、生まれ育ったまちや人のよさを知り、ふるさとへの愛着や誇りを持たせること、さらに、学校を起点としながらも地域の活性化に寄与することを念頭に置いた。そして小中高のカリキュラムを連動・連結させ、ふるさとの特色は、児童生徒にとっても、生きてはたらく上での「強み」や「可能性」になりうるという理念に基づいて実践を重ねてきた。

このことにより、以下の成果があった。

- ・ふるさとの歴史や文化、自然、しごと、人の“よさ”（魅力、価値、強み）を児童生徒の心に刻み込むことができた。
- ・「このまちをふるさとに持つ児童生徒のアドバンテージ（強み、有利さ）としてこのまちの可能性を生かそう」ということと「このまちの課題を改善・解決する方法を、将来住まう地域の課題に立ち向かうための“汎用的能力”として身につけよう」という2つの提案ができた。

これからも、小中高がさらに結びつき、社会に開かれた、より地域とともにある、ふるさとの魅力や強み等を生かした教育課程（カリキュラム）の在り方を探っていきたい。

②「つなぐ」ことによる効果について

本研究では、ふるさと学を推進するうえで、様々な“つながり”を構築した。

- ・コミュニティ・スクール（学校運営協議会）との連携（相乗効果）
- ・地域学校協働本部（「オールくちのつ」）からの支援
- ・小中職員によるカリキュラムの共有や協働作業によるカリキュラム検討会の実施
- ・教科横断的な学びの推進、小中・中高・小高の合同授業の実施
- ・「キャリア・パスポート」等を活用した引き継ぎによる学びの蓄積・継続・発展
- ・各校の担当者同士、教頭同士、校長同士の意思疎通と共通理解の構築

また、「学び」をつなぐための考え方として、以下のことを提示した。

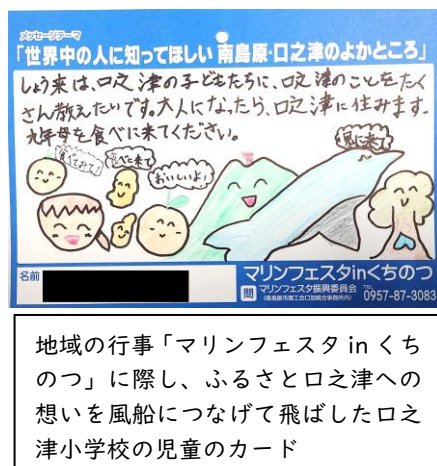
- ・「もっと知りたい、学びたい、自分の力を伸ばしたい」が進学へ
- ・「自分の資質・能力を生かしたい、世の中や人の役に立ちたい」が就職へ
- ・「豊かに生きたい」が生活（くらし）の充実へ

これらは、「ふるさと」を関連づけ、または「ふるさと」を軸にした学びを構築することにより、一層主体性を高め、生き方を充実させていくと実感している。

③今後の「ふるさと学」について

「ふるさと学」はオーダーメイドであり、地域と学校が、そこに生きる子供たちを育てるためにゼロから創っていくべきものである。「くちのつモデル」カリキュラムを他地域でそのまま活用することはできないかも知れない。しかし、口之津がカリキュラムを創ってきたプロセスを活用して、その地域ならではのカリキュラムを創り上げることはできるのではないだろうか。

予測困難な未来ではあるが（そんな未来だからこそ）、児童生徒が、自身のキャリア形成の方向性に応じて積極的にふるさとに関わり続け、自身の未来に生かしたり、ふるさとに貢献したりするという意識や実践力等（主体的に生きる力）を、志をもって高め続けていってほしい。



地域の行事「マリンフェスタ in くちのつ」に際し、ふるさと口之津への想いを風船につなげて飛ばした口之津小学校の児童のカード

小中高が一体となったふるさと教育
モデルカリキュラム

令和7年3月31日発行

発行 長崎県教育委員会

編集 長崎県教育庁義務教育課
長崎県長崎市尾上町3番1号
TEL 095-894-3373（代）

